

科学論・科学技術社会論の視点を「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」に適用する——小西甚一を援用し、見えてくる文化受容の「漢文方式」から「資格（英語・博士号）方式」への転換 その八

草 薙 太 郎

# 科学論・科学技術社会論の視点を「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」に適用する——小西甚一を援用し、見えてくる文化受容の「漢文方式」から「資格（英語・博士号）方式」への転換 その八

## 草 薙 太 郎

本稿は全体として以下の構成を持つ論文シリーズの一部である。

### 1. はじめに

#### 1-1 考察の主題と先行研究

#### 1-2 「技術官僚モデル」が当てはまる先行研究

#### 1-3 「技術官僚モデル」と「モード論」の関係を検討して今後の日本の文化受容のあり方を予測する

#### 1-4 「モード論」, 「技術官僚モデル」, 文化の授受方式の図式化

#### 1-5 中国, 韓国に比べ日本が近代化で先んじた理由を図式で説明

#### 1-6 「文学研究」を「科学」にするため「いわゆるいいがたきもの」の排除

#### 1-7 「科学」であろうとする「文学研究」が関連する「倫理」を中心にした様々な観点

##### 1-7-(a) アメリカのミクロ倫理

##### 1-7-(b) 日本のメソ倫理

##### 1-7-(c) 西欧のマクロ倫理

##### 1-7-(d) メタ倫理

##### 1-7-(e) 多文化主義と「テロ対策」が行動主義的政治哲学へ

### 2. 科学論・科学技術社会論の視点での「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」の分類と考察

#### 2-1 「技術官僚モデル」から「モード論」へ

##### 2-1-(a) 「技術官僚」の教養が「モード論」で崩壊

##### 2-1-(b) 「モード論」で歴史感覚が崩壊

##### 2-1-(c) 文化の数理性, 音楽性追求が「知的財産」問題に

##### 2-1-(d) 西欧文化のマイノリティー迫害告発（多文化主義への底流）

##### 2-1-(e) 多文化主義, 文化的唯物論視点での「シェイクスピア現象」論

##### 2-1-(f) 「調査的面接法」による「シェイクスピア現象」研究

##### 2-1-(g) ホモセクシュアルが照射する「技術官僚モデル」から「モード論」への動き

#### 2-2 「技術官僚モデル」と「モード論」の共通項探究

- 2-2-(a) アングロサクソニズムについて
- 2-2-(b) 大陸西欧文化について
- 2-2-(c) キリスト教について
- 2-3 科学技術社会論の「シェイクスピア現象」への適用
  - 2-3-(a) 女性学傾向の社会論
  - 2-3-(b) (科学技術) 社会論
  - 2-3-(c) 政治学 (法学) 傾向の社会論
- 3. 終わりに

以上のうち以下を本稿に収録してある。

### 2-3 科学技術社会論の「シェイクスピア現象」への適用

#### 2-3-(b) (科学技術) 社会論 (2)

この項目は長大なため、(1) (2)・・・と区切って順次収録してゆく。

### 2-3 科学技術社会論の「シェイクスピア現象」への適用

#### 2-3-(b) (科学技術) 社会論 (2)

日本が「言霊に満ちている」国だということは、かつて実感があっても、現代では分かりにくい。しかし、万葉和歌の世界で中国文化との接点を意識し、現在、アメリカ文化との接点を意識する中で、明確化されるのではないか。このことは、先述した、村上がいう以下の二点について、新しい考え方を提起することになる。

1) 「言霊の幸ふ国」という表現は、しばしば、言語を重要視する日本人の特殊な感覚を示すものととられるし、それはそれで間違いはないにしても、一面、「言語」に、玄妙な機能を期待すること自体が、すでに、言語に対し、判断・分別のもつ公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求め、かつ認めていることになりはしないであろうか。俳諧や短歌に見られる「言葉」の極度な象徴化も、そこに出発点がある

2) 判断・分別を出発点とし、その表現型としての「言葉」による断定を、思想の最も基本的な位置に据えるヨーロッパの構造を、日本人が基本的に欠いている

以上の二点は、日本人が万葉和歌の昔から漢字仮名混じり文を採用したからだ、たとえば、奇矯な考え方になるであろうか。

まず「言語に対し、判断・分別のもつ公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求め、か

つ認めている」という村上の指摘が正しいかどうか桜について考察して確かめてみよう。

「ねえ、どうして / 桜の木って切ないの？」という秋元康の詩の言葉は、「公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求めて」いるのだろうか。

これで想起されるのは、同じ歌謡曲の歌詞ということで（秋元康は美空ひばりが歌う「川の流れるように」の作詞者であり、AKB48に歌わせても歌詞は「歌謡曲」である）「花も嵐も踏み越えて・・・」（西条八十作詞、万城目正作曲「旅の夜風」の冒頭）がある。ある程度年配の日本人なら知っていて、さらに多くは冒頭だけでも記憶にとどめている歌詞である。

「So long!」にせよ「旅の夜風」にせよ、桜の花を意味する「花」について、日本人を対象とする限り「公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求めている」とは言えないと思う。「花」が第一義的に桜の花を意味し、人や土地との別れの情を誘う存在であり、古来多くの詩歌がつくられた対象であることは、日本人の常識であり、「花」という日本語は、その意味で「公共的、普遍的な伝達機能」を持つ。そもそも「So long!」にせよ「旅の夜風」にせよ、大衆の心をつかんで売上を伸ばすことを念頭に書かれた歌詞であり、「公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求めている」のは殆ど許されない。これに比べればフランス語のサンボリズムの詩などの言葉の使い方の方がよほど「公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求めている」ことになる。

歌謡曲の歌詞に出てくる桜の花や「花」が「公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求めている」とすれば、植物学的なラテン語の学名を基本として、植物分類の上になって日本の「桜」が総称するところを指定し、その上に小西が言う「花の持つ霊性」が構築できるかどうかを問い、日本語の「花」だけに付与される意味内容を、英独仏の「花」に対応する言葉と比較した上で、「玄妙な機能」をもっと説明して「公共的、普遍的な伝達機能」に差し替えろ、といった主張になる。

そうした主張に応えるには、「花」という日本語を使う度に、小西の『文藝史』シリーズで「花の持つ霊性」について解説した箇所を要約して付記しない限り、言霊と関係する「花」を使えないことになる。

けれど、こうした言語の「玄妙な機能」を「公共的、普遍的な伝達機能」へ差し替えろという要求を考えると、それは村上自身の文章「言語に対し、判断・分別のもつ公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求め、かつ認めている」そのものについても言える。

「判断・分別のもつ公共的、普遍的な伝達機能」という表現に問題はないだろうか。この文章を理解するには、まず「公共的、普遍的な伝達機能」という表現について「パブリック・コミュニケーション」というカタカナ言葉にも出来る英語の理解が必要であり、「パブリック」の意味と、「コミュニケーション」の意味を、さらに深く知る必要もある。これを「市町村など公共団体のお知らせ」のことだろうか、などという理解では文章の意味を読み取ることは出来な

い。また「判断」も「分別」も、別々にすれば比較的分かり易い漢語ではあるものの、中黒でつないで「判断・分別」とすれば、もとになった英語句と、それが出てくる論文を調べたくなる欲求を感じるのは私だけではないであろう。

同じことが先述の「パックスロマーナを念頭に、英国がパックスブリタニカを実現し、またパックスアメリカナが実現し、それは受け継がれるアングロ・サクソン民族の多民族支配の願望である」という文章についても言える。カタカナ言葉を、漢語を含む句に替え、『ローマの平和』を念頭に、英国が『英国の平和』を実現し、また『アメリカの平和』が実現し、それは受け継がれるアングロ・サクソン民族の多民族支配の願望である」とすれば、先述の「パブリック・コミュニケーション」を「市町村など公共団体のお知らせ」のことだろうかと思解するのと同様、『ローマの平和』『英国の平和』『アメリカの平和』をそれぞれローマ人、英国人、アメリカ人がそれぞれの国でのんびりしている様子を思い浮かべればいいのだろうか、といった誤解も想定できる。

つまりこういう表現の場合、「言外の意味こそ重要」なのである。

それは '*Pax Romana* in mind, UK realized *Pax Britannica*, and US realized *Pax America*, which is Anglo-Saxon's inheritable desire to rule the other peoples.' という英語の文章でも同様である。'*Pax Romana*' '*Pax Britannica*' '*Pax America*' も、同じ意味の日本語の文章同様、それぞれローマ人、英国人、アメリカ人がそれぞれの国でのんびりしている様子を思い浮かべる誤解が生じる可能性は十分ある。

英国人がこうした問題に苦しまないのは、こういう英文の後には、必ず '*Pax Romana*' '*Pax Britannica*' '*Pax America*' の分かり易い解説が付く。英文の中でラテン熟語が使われる頻度はあまり高くない。重要な論文を英語とラテン語と両方で書く習慣があった英国では、英語にラテン熟語を交えることは、そう多くない。

ところが漢文の書き下し文で出発した日本の漢字仮名混じり文の場合、明治の言文一致運動以来、多くの漢字、漢語がちりばめられ、その状態は今日になっても継続している。それだけでなく、「中華人民共和国」の名称の大半は日本で発明された漢語だと言われるように、新しい事物に対応する漢語を上手に発明しながら日本の漢字仮名混じり文は磨かれてきた。といって、日本人の中国語そのものへの学習熱はそれほどではない。この点は、殆どのパブリック・スクールでラテン語学習が必修に近い英国とは異なる。

「公共的、普遍的な伝達機能」という表現について「パブリック・コミュニケーション」というカタカナ言葉にも出来る英語の理解が必要と先述した。日本が文化を吸収する相手国が中国から西欧へ、さらに欧米へと変化するにつれ、英語の重要なフレーズをカタカナ言葉になおして文章にちりばめる、漢字仮名混じり文ならぬ「カタカナ語仮名混じり文」も多くなる。村上の「公共的、普遍的な伝達機能」という表現は、まず英語など西欧語で認識され、カタカナ

言葉になおされ、それを文章上手で文学の見識にすぐれた村上が漢語に翻訳しなおした結果生まれた表現ではないか。

さて、中黒でつないで「判断・分別」とすれば、もともなった英語句と、それが出てくる論文を調べたくなると先述した。それは調べなくても、同じ村上の著書の中で、中黒でつないで「認識・判断・分別の世界」という形で出てくる。<sup>1)</sup>フロイトからユングに至る人間の意識構造を意識の世界と意識下の世界に分けた場合の、意識の世界のことである。村上はこれ（意識と意識下の二項対立）を「露頭」と「鉦脈」とも表現し、西欧人の自我の中心は「露頭」にあり、日本人の「自我」の中心は「鉦脈」にあるといった議論を展開し、それを愛の問題にまで発展させている。<sup>2)</sup>

この二項対立の概念のもともなった英語句は‘conscious’‘subconscious’である。以後は村上以外の文献も引用したいので、この英語のもう少し一般的な訳語である「意識」「潜在意識」を、これ以後は使用したい。

ここで潜在意識と言霊を結びつける議論<sup>3)</sup>を検討したい。参考になるのは謝世輝というペンネームで活躍する人物である。本名は河津世輝で1929年、台湾生まれ、台湾大学を卒業後、名古屋大学大学院で原子物理学の博士号を取得。理学博士。元相模工業大学、東海大学教授。科学の進歩・発展は必ずしも人類のためにならないと考え、文明・文化史及び歴史学に転身した人物である。この人物の議論のうち、注目したいのは潜在意識と言霊を結びつけることである。

小西の議論を要約すれば、言霊とは、讃人歌、讃所歌に出てくる言説で、漢文書き下し文の使用で意識された日本古来の感覚であるということになる。これは漢詩の創作、漢詩の和歌への移し替えと密接な関係にある。やがて漢字仮名混じり文(カタカナ語がやがて漢語に混じる)外国文化を外国語の熟語（ときに日本人が創作する漢語、ファイン・プレイなど和製英語の表現）で把握することにつながる。

一方、項目「2-2-(a) アングロサクソニズムについて」で先述したように、小西は精神分析学についてバシュラールを取り上げながら「フロイト説は、自然科学ふうな客観的認識を装いながらも、その中核においてかれ自身の主観（漢語化すれば独断）が決め手となるため、ほんとうに自然科学と人文科学を結びつける契機ではありえない」<sup>4)</sup>と断定する。

潜在意識と言霊を結びつけることで謝世輝は参考にしても、その論旨のうち「言霊や潜在意

---

1) 村上陽一郎、『近代科学を超えて』、(1986), p.198.

2) Ibid., pp.197-201.

3) 謝世輝、『言霊の法則（文庫）』、(サンマーク出版 2001.9).

4) 小西甚一、『日本文学原論』、(2009), p.715.

識の力を信じれば、あなたは成功する」式の主張は排除したい。私自身も出版社の要請でその種の著作がなきにしてもあらずながら、この種の主張をすると、まさに「ほんとうに自然科学と人文科学を結びつける契機ではありえない」どころか、疑似科学視されかねない。小西自身も能楽などを精神分析学で読み解き<sup>5)</sup>、言霊について繰り返し語り、日本の成功について、その中心に一種の「家」の競争（和歌の「家」である冷泉家を中心にした争いについて特に詳しい）を主体にした「日本力」のようなものがあると言わんばかりなのに、（ということは言霊の力で日本が成功したことになる）、言霊に成功の秘訣があるとは、一言も言っていない。

さらにフロイト説は「独断」が介在するから科学ではないとの小西の指摘については、以下の村上の指摘が重要になる。

「個人的」な「私有」の世界が、「公共的」で「普遍」の世界にならなければなるまい。

これを保証してくれるのは、やはり、神以外にない。絶対者としての神の理性にとって真なるからこそ、唯一普遍絶対の世界であり、相対的で孤立した個人の世界は、絶対者を通じて、絶対者の世界につながるができる、と考えることになる。

このような思想構造が、ヨーロッパのものの考え方の底流を形成しているものであるとすれば、「個人」と「公共性」とが、どちらがどちらに影響を与えるか、つまり、その先後関係—おそらくそれは、一方的というよりは、相互干渉的な働きかけであろう—はともかくとして、この両者が、きわめて密接な関係にあることだけは明らかである。神に頼らないとすれば、現在のヨーロッパ哲学の一部に見られるような、「間主観性」などという概念を持ち出さなければならなくもなる。

フロイトを科学と見做さないのは「独断」ゆえという小西の意見は、自然科学が主観を排除していると認識する点において、村上が認識する科学とは違う。村上によれば、相対的で孤立した個人の世界は、絶対者を通じて、絶対者の世界につながるという。つまり、敷衍すれば、科学は「独断」の塊であって、「独断」のぶつけ合いから、「動かぬ証拠」の提出合戦になって「科学的真実」が決まってゆく。一方、小西の言い方からは一種の「独断の絶対的排除」思想が窺われる。西欧的な一神教の神は排除されることにおいて、これは、むしろ言霊思想なのではないか。

この点を人麻呂の歌で小西が言霊を指摘するもの、即ち「やすみしし 我が大君の・・・」（万葉1・三六）「見れど飽かぬ・・・」（同・三七）で説明したい。持統天皇の讚人歌であり、同時に持統天皇が愛した吉野の地の讚所歌であるこの歌で語られる言霊思想を、上記の「讚人歌、

---

5) 小西甚一、『日本文藝史Ⅲ』,(1986), p.527.

讚所歌に出てくる言説で、漢文書き下し文の使用で意識された日本古来の感覚」で説明するとすれば、「天皇」という漢語の二文字熟語の説明をすれば足りるのではないか。

「天皇」は小西によれば「天皇大帝」という道教の天界における最高神の概念を現実の君主に比喩的な意味でなく適用した<sup>6)</sup> という、いわば漢語の日本流組み換えであり、敷衍すれば、日本人が得意とする創作漢語（生前の活躍中の君主の呼称という、中国にはない意味の日本製漢語という意味で）であったと解釈できる。とはいえ、人麻呂の持統天皇を讚える上記の歌は、持統天皇のときに「天皇」の呼称が確立されたといわれるのに、「大君」と書かれ「天皇」とは書いていない。

これは漢詩文の洗練された教養感覚と、日本古来の純朴さを、兼ね備えた文藝として万葉和歌があるためではないか。ヤマトの『万葉集』が個人の心情を文藝的な緊張のもとに表現する抒情歌の集なのに対して、社会ぜんたいの所産であるオモロは、呪禱的な詞章から叙事歌謡や抒情詩へ進もうとしている段階に過ぎないと、『おもろさうし』を琉球の『万葉集』だとするのを、小西は俗説と切り捨てる<sup>7)</sup> のは、この事情によると思われる。

文藝史的に文藝の成熟ステップを考えるとすると、ヤマトの『万葉集』だけ、古来の純朴さから洗練された教養感覚へ特急列車で移行したように見える。大和言葉主体なので、中国の影響なしに日本人が自力で万葉和歌を創出したように見えるから、そのスピード感に驚かされる。しかし、それは誤解であって、その原因は、漢詩文にくらいついたヤマトの文人の姿勢によるのではないか。徹底して大和言葉を使い、言霊思想を語ることで、一見純朴な作風に見える。けれど、実態は中国古典文学の亜流のような洗練された教養感覚を持つ。漢詩文の洗練された教養感覚を和歌に写し取ろうとする、いわば中国古典文学のヴァリエーションのような性格が万葉和歌にあるのではないか。

これは、当時の日本と中国の適当な距離感にもよる。漢文の口語的表現を口語的と知ってか知らずか高雅な詩句とみなしたり（憶良の、「好去好来」は多分にその気味がある）創作漢語を成す日本は、韓国・沖縄より、中国という本家を凌ぐ亜流文化創生に有利であった。韓国・沖縄の場合、中国と近過ぎるか、文字に定着する高度な自前の文藝が盛んでなかったかして、中国文化を料理する距離感はなく、その代わり、おそらく中国語の口語的なニュアンスなどを解する人々がヤマトより多かったであろう。そうした事情がないから、適度な距離感を持って中国文化を料理でき、かえって素朴な段階をすっ飛ばして中国文学の精髓を、純朴な装いの亜流文化創生の形で、取り入れてしまえたのではないか。

韓国の場合、古代から中世を念頭においてであろう、東アジアの文藝を概括して韓国に言

---

6) 小西甚一、『日本文藝史Ⅰ』,(1985), p.378.

7) Ibid., p.111.



及するとき、「文藝作品のおよそ八割以上が漢詩文だった」と小西は指摘<sup>8)</sup>する。沖縄の場合、文字に定着する高度な自前の文藝が盛んでなかったのか『おもろさうし』の時代になって初めて万葉和歌との比較が可能になるほどの文藝が文藝史に登場する。比較はしても、純朴と見せかけて内実とはいえば、万葉和歌の高度な発展ぶりは際立つ。沖縄は薩摩侵攻を受け、すぐに『おもろさうし』の仮名表記が生まれ、ヤマトの影響が濃くなる。中国文藝のレベルで自国固有の文藝を発達させた万葉和歌のような現象は起こらなかった。ヤマトのように、漢語をとりこみ、漢字仮名混じり文の中で、創作漢語を成すような形の文化摂取は、極めてユニークだと言わねばならない。

創作漢語の一種とも見做せる「天皇」という二文字熟語は、言霊を背景に持つがゆえに、カタカナ言葉の「エンペラー」と同義語ではない。言外にこめられた含蓄こそ、最も重用すべきものであると考える習慣を持つ日本人によって、今なお言霊の背景が感じられて権威を持つのではないか。それは野球の世界で「天皇」と呼ばれる長嶋茂雄についても言える。ファイン・プレイの連続（それが演出と分かって賞賛は止まない）という和声英語の句（アメリカの野球用語ではステラ・プレイズ）で褒め称えられる人物も、「天皇」と呼ばれるのは、この二文字熟語の言外にこめられた含蓄によって尊重され、いわば人麻呂の和歌の言霊によって常人ではない扱いを受ける形式を踏んでいるといっても過言ではない。これは長嶋が活躍した時代のアメリカとの適度な距離感が成せる業でもある。（これに比べ、松下幸之助は「経営の神様」と呼ばれても「家電業界の天皇」とは呼ばれない。アメリカ式の起業を行った、アメリカ型の創業者で、東京への批判精神も堅持していた。エジソンに近いオリジナリティーがあって、同じ昭和の右肩上がりの経済成長の精神的支柱でありながら、長嶋茂雄が「天皇」であることとは、やや違う。また、ホームラン記録を数字で示した王貞治も「天皇」とは呼ばれない。）

一方、英国では‘Queen Elizabeth’を‘Elizabeth Regina’とラテン語で表記することもある。かつて僧侶の身分保障のため、ラテン語で聖書をそらんじれば死罪を免れた歴史もあったものの、こうしたラテン語に現代ではもはや権威付けの意味はあまりないと思われる。西欧の王や女王は聖油の秘蹟など、神による権威付けが歴史的なもので、英国の場合は議会の方が国権の最高機関で、むしろ王位に権威付けする立場である。村上の言う「パブリック」ないし「公共」の権威付けがあると考えても良いのではないか。その関連で「パブリック」がラテン系の言葉であることはラテン語の歴史的な権威付け機能の残存として多少影響力を残しているのかも知れない。

そう考えると、日本の「天皇」の権威は、幕府によって制限されたり、明治以来富国強兵策で補強されたり、昭和のファシズムで神格化されたりしたものの、生き延びる秘密は「天皇」

---

8) Ibid., p.50.

という二文字熟語と、そうした言葉の「言外にこめられた含蓄こそ、最も重用すべきものであると考える日本人の習慣」による言霊の力と考えられるのではないか。

言霊による尊皇思想について、「大君は 神にしませば・・・」に、儒教と道家思想という漢民族的なものが、仏教に加えてであると小西は言う。<sup>9)</sup>しかし「神にしませば」を強調し過ぎると皇国史観が想起される。そもそも和歌の中で「天皇は神だ」と表現するということは、一神教的な神による王権神授説の西欧とも、天皇神格化と人間宣言とに象徴される昭和の軍部による権威付けとも、万葉和歌の立場は全く違うことを示す。とはいえ、天皇神格化の動きも含め（それを排除する考え方も含め）、むしろ「天皇」の二文字熟語という漢語の力を強調してもよいのではないか。それは日本の技術力とも結びつく。例えば釈迦牟尼、阿弥陀如来、大日如来・・・といった仏教の「尊称」というよりむしろ「四文字熟語」について、仏教の偉い存在という言葉の意味だけでなく、「言外にこめられた含蓄こそ、最も重用すべきものであると考える習慣」（実際、インドから中国を経て伝来した仏教の経典や理論こそ、仏像そのものより重要であるし、それを日本人は十分意識する）があるからこそ、また、そうであるにも関わらず、これらの仏像に技術力を集中する習慣が日本人にはある。

小さな仏像に名工が技術力を結集して作り上げたものを、尊重すべきは背景になる仏教理論であって仏像そのものではないと知りつつ、仏像一体を彫りあげて拝むだけで、日本人は仏教信仰のすべてを体得、会得、味得した気になる面がある。世界に目を転じれば、キリスト教、イスラム教、仏教（日本以外の）の場合、ある程度の大きさの教会、モスク、仏教寺院が必要なのではないか。小さな像一体だけで、日本人ほど宗教感覚のすべてを満足できた気になれる民族はいない。ということは、仏教なら仏教そのものも尊重しつつ、本音では技術信仰と言霊信仰が結び付いた宗教感覚の方を日本人は大切にしているのではないか。

寺院ではなく小さな仏像（ときに米粒に刻まれた仏像）で技術信仰と言霊信仰が結び付いた宗教感覚を満足できる日本人の特性は、科学技術にも反映している。そのことは、伊能忠敬の地図にも見ることができる。それを言うには韓国人の書いた日本の地震学についての評論の説明をする必要がある。

地震学が明治以来日本の近代化を反映していたことを『科学技術社会論研究 6』（2008）の書評欄のうち枅内、前田による書評から読み取ることが出来る。書評の対象になった書物は金凡性（KIM Bounsung）『明治・大正の日本の地震学—「ローカル・サイエンス」を超えて』である。ソウル大学卒で、東大で日本地震学史の研究をして博士号をとり、2008年現在特任助教として科学技術インタープリター養成プログラムを行っている、著者の紹介がある。（2013年時点ホームページによれば広島工業大学環境学部地球環境学科准教授に就任してい

---

9) Ibid., p.377.

る。) 植民地科学, もしくはローカル・サイエンスであった日本の地震学が, どう国際性を獲得し, 「ローカル知」が「普遍知」化していったかという点に着目している。なかなかノーベル賞がとれない中国, 韓国の留学生にとって, なぜ日本がアジアで唯一ノーベル賞をある程度取れるのかは羨望も交えて研究対象になっていて, 日本人自身も, 日本人のアイデンティティーを考え, その近代化の意味を考える上で重要である。

それはそうなのだが, この本を読んで, おそらく著者が理解しないであろうと, 僭越にも私が思うのは, 元々の包括的な体系から細部を切り取り, そこに細密加工をする日本の技術力と執念である。この事情はノーベル文学賞を考えれば分かりやすい。川畑康成や, 情報公開でノーベル文学賞候補であったことが分かった谷崎潤一郎は, 漢詩文から繊細な感性で受容する部分を切り取って独特の細密加工をした, 日本の和歌や日記文学の伝統に立つ。大江健三郎はフランス文学の持つロゴスとロゴスへの反逆の世界を, 上記二人が漢詩文に対して行ったのと同じように料理し, 細密加工を施したのではないか。

それはともかく, 金凡性の著作に戻れば, この本は日本の地震学が植民地科学の状態を脱した様子を描写する。その基準は「知識を生産する際の分業における機能的・位階的關係」<sup>10)</sup> になる。「中心」と「周辺」を地理的・地政学的な関係としてではなく, 「機能的・位階的關係」として捉えなおすという立場である。西欧中心の科学が主体で, アジアなど周辺国は相手にされなかったところから地位改善されたという話ではなく, 科学そのものの体系を問題にする。リスクの高い原理探求の作業と, 単純でリスクの低い周辺の作業を, 位階的關係として位置付ける話になる。

けれど伊能忠敬の日本地図作製は, 位階的關係として位置付ければ, 単純でリスクの低い周辺の作業である。いくら当時の暦学の知見を結集し, 実地計測で測量し, 緯度や経度を書き込んであるといっても, その測量体系を独自開発した訳ではない。緯度や経度の概念の根本になる世界観を自前で開発した訳でもない。ゆえに伊能忠敬の地図作製は「植民地科学」に過ぎないはずである。ところが, この地図を見た英国政府は, このような地図作製が可能な日本を植民地化するのは無理と考え, 植民地化を断念して貿易相手国として開国を迫る方向に方針を変えたという。伊能忠敬の地図は「中心」と「周辺」を地理的・地政学的な関係としては対等な関係に持ち込む威力があったことになる。

金凡性は「日本人科学者が続々とノーベル賞を受賞しているという現在の言説空間においても日本人の独創性を問う議論は消えていないが, 実践的な含意を持つ議論は, まず研究の現場,

---

10) 金凡性 (KIM Bounsoung), 『明治・大正の日本の地震学—「ローカル・サイエンス」を超えて』, p.11.

科学活動の実状を綿密に観察することから生まれるのではなからうか<sup>11)</sup>と言う。これは「この本を読んで、おそらく著者が理解しないであろう」と僭越にも先述したことが関係してくる。つまり「単純でリスクの低い周辺の作業であると、位階的關係として位置付けられる」仕事を、そのまま「独創的研究」に変身させてしまう日本人の才能である。

繰り返しになることながら、伊能忠敬は測量法や緯度経度の概念、その背景にある世界観を自前で開発したものではない。けれど、小さな仏像を、細密加工技術を駆使して刻み上げて拝めば、それで、自前で開発した訳でもない仏教理論を体得、会得、味得したつもりになることと同じく、測量法や緯度経度の概念、その背景にある世界観を、まるで自前で開発したものごとく、体得、会得、味得したつもりになるのが日本人の特性である。それは「つもりになる」だけでなく、その感覚を普遍化して提示し、ある程度世界で認められてしまうのだ。この芸当に韓国人研究者は、羨望とともに、いささかインチキではないかとの疑念を抱いているのではないか。

この問題は長岡半太郎がすでにぶつかった問題であることを金凡性は指摘する。長岡は、日本の科学がほとんどローカルなテーマや実用性を念頭においた課題しか研究しないという、「劣等性」の意識があって、日本人にも欧米人のように科学研究ができるかについて疑問を感じ、休学して史書を調べ、中国で行われた科学的な成果から東洋人も科学能力を持つことを確信し、大学に戻ったものの、ロンドンの物理学会から世界に12人しかいない名誉会員に推薦され、やがてノーベル賞受賞者の推薦を依頼される立場になっても、日本人受賞候補を推薦できなかったことを指摘する。<sup>12)</sup>

日本人にも欧米人のように科学研究ができるかについて疑問を感じるのは、村上陽一郎も同じではないか。度々引用する、判断・分別を出発点とし、その表現型としての「言葉」による断定を、思想の最も基本的な位置に据えるヨーロッパの構造を、日本人が基本的に欠いている、という指摘は、ロゴスを基本とする西欧科学に日本人はなじまないという指摘である。

科学研究は人種や国籍によって研究ができたりできなかったりするものではないと思う。ただし、自然を対象とする自然科学では、自然と厳しく対峙する態度が求められる。ロゴスは人間の特性であると同時に自然とは一体化しない人間のありかたでもある。自然科学を排除して論を進める小西の『文藝史』シリーズは、かえてこの点を明確にしてくれる面がある。そして「自然と人間との関係においては、シナ文藝は、基本的に対立性をもつ」という小西の指摘<sup>13)</sup>は中国がこの傾向を持つことを示唆してくれる。中国で行われた科学的な成果から東洋

---

11) Ibid., p.145.

12) Ibid., pp.120-121.

13) 小西甚一、『日本文藝史Ⅰ』(1985), p.51.

人も科学能力を持つことを長岡が確信したのも、頷けることになる。

一方、韓国は先述のように「文藝作品のおよそ八割以上が漢詩文だった」上に、コリア固有の詩型でシナの「雅」なる詩に対抗できる表現を創作しようという態度が採られなかった<sup>14)</sup>と小西は言う。これは日本とは違う。さらに日本統治時代、日本人はハングルに注目し、日本の漢字仮名混じり文に倣って「漢字ハングル混じり文」を導入しようとした。けれど、韓国は独立とともに、漢字を教えない政策をとって、現在はハングルだけの使用を定着している。漢字を自分たちの国に混じりこませ、独自に漢語を創作して、大国の文化を吸収しつつ独自の文化を築き上げるといった日本の技術は、韓国には理解されなかったのであろう。けれど、常に漢字を混じりこませ、漢文が本当の文章で、仮名は仮のものとして、しかし、言霊を強調して大和言葉で和歌をつくり、けれど、それは漢文の書き下し文の文藝的な水準を写し取るものという、複雑な手順を理解できる外国人がいるだろうかと思えば、まずいないであろうとの推察に至り、韓国の独立後の反応の方が自然だという結論になる。日本のように漢字という外国語を切り取って自国の文字体系に混じり込ませ、数文字の漢語を、ときに創作して、外国文化輸入の窓口にする芸当は、極めて特殊なものである。しかし、その特殊な芸当こそが、アジアで唯一、ある程度のノーベル賞受賞者を生み出す秘訣ではないか。ただし、日本文化のオリジナリティーは、常にやや疑問視される。

これは万葉和歌という文藝に、果たしてオリジナリティーがあるかという問いにも関わる。それをほとんど百パーセント信じたのが「客観写生」の考え方を主張した正岡子規とその門流であった。これに激しく小西が反発することは、「シナの愁思詩に触発されて偶発的に生まれたもの」と家持の最高傑作を批評することと、表裏一体である。正岡子規とその門流、アララギ派や近代ロマン派の詩人たちが家持の絶唱とあがめる一連の作品のオリジナリティーに、やや疑問を呈したのが小西のこの発言であった。

こう考えると、科学研究でのオリジナリティーを問題にすることは、文藝史的に文藝の成熟ステップを考えるとすると、ヤマトの『万葉集』だけ、古来の純朴さから洗練された教養感覚へ特急列車で移行したように見えることが、同じ原因ではないかと思われてくる。

つまり漢字仮名混じり文という、日本の近代を支えた文字表記の根幹をなす仮名が発明される草創期に、すでに中国文藝を、感性で受容できる部分を切り取って細密加工した垂流かと思われる万葉和歌が出現したことは、明治期の発展、戦後の奇蹟の復興の根本原因を探るヒントを与えてくれる。

万葉和歌が出現した原因について「漢詩文にくらいついたヤマトの文人の姿勢」をその主因だと先述した。純朴な心情を温存したまま、大きな文明、文化に「くらいつく」のが日本人の

---

14) Ibid., p.50.

特性である。明治以後は、中国に替わって大きな文明、文化になった西欧に「くらいついた」結果、明治期の発展、戦後の奇蹟の復興が実現したのではないか。そして「くらいついた」のは主に言霊思想によってではなかったか。

万葉和歌について、言霊思想（というより制度化した言霊思想）の特質を、これまでの考察を踏まえて整理して、箇条書きにすれば、以下ようになる。

(1) 讃人歌、讃所歌中心の祈念と記念日（祈念日）設定感覚

(2) 数文字の漢語の熟語に注目し、多くの意味を象徴させ、外国文化取り入れの窓口とする。ときに日本側で創作漢語を作成し、カタカナ言葉と併用し、近代以降は西欧の文化取り入れの窓口とした。言霊は本来漢詩文など外国語では表せないものなのだが、それゆえにかえて日本人に言霊を自覚させ、大和言葉で言霊を表現しつつ、次第に漢語でも表現するようになる。

(3) 逆に大和言葉のみを使うことを目指した和歌を制作しながら、言外に漢詩文の内容を象徴させる。それが短章性でよしとする理由にもなる。

(1) について解説すれば、先述の「小西は高層ビルディング建設でも地鎮祭に神主が祝詞をあげないと関係者の心が安定しないことを指摘」した中で、結婚式では「切る」「離れる」「出る」「遠くなる」の語は口にしないように注意すべきとされ、猿でさえ「去る」に通じるから話題にしてはいけないといった例が挙げられている。けれど、こうした言霊思想そのものを問題にしていると、村上の批判「ヨーロッパの構造（言葉をロゴスとする論理構造）を、日本人が基本的に欠いている」の証拠にされかねない。

言霊思想そのものではなく制度化した言霊思想を問題にすべきではないか。「友引」だから葬式をしてはいけないという思想（高島暦などの考え）は浄土真宗では否定されている。そうしたことを好ましくない因習と看做して親鸞聖人が闘った考えに、現在の浄土真宗の僧侶が沿う形で「友引」の因習に立ち向かおうとしても、「友引」の日には地方公共団体が営む火葬場が休みになるので、物理的に葬儀を行うことは不可能になる。言霊思想そのものは科学的立証や論理的証明が困難である。しかし、制度化した言霊思想は、現実の制度なので、少なくとも日本人がこの思想によって行動していることの証明が可能になる。

この視点で見れば、「ロゴスのヨーロッパ」にも祈りの習慣はある。南アフリカ大統領をつとめたネルソン・マンデラを記念した日が、西欧的ロゴスによる平和構築を理念とする国連に設けられ、南アフリカでマンデラの誕生日には奉仕活動を行うことが決められていたりすることは、日本の制度化した言霊思想を再認識させてくれる。一定の期間に日を決めて清掃活動をする制度を設ける組織が日本にはあり、大晦日に清掃を行い、初等中等教育では清掃活動を毎日行うことは常態化している。これらを、讃所歌（その組織が設置されている場所の）、讃人

歌（創始者の彫像があれば、その周りを念入りに清掃することが多いので）の持つ「制度化した言霊思想」と見ても良いのではないか。

戦死者などの慰霊の日、慰霊碑などは世界中にある普遍的なもので、「制度化した言霊思想」は決して日本だけのものではない。問題は（2）（3）への展開である。初等中等教育の各国の比較で、日本だけ生徒に清掃をさせるという（1）は有名である。「明快な理由があれば」英国の中等教育でも清掃は生徒にさせる。英国のストウ・スクールを訪問したとき、先生の監督のもと、生徒が大掃除をしていた。おそらく寮の中での引っ越しか何か、それなりのイベントであったのだろう。そういうときには英国でも生徒が清掃する。清掃を生徒がする理由を、尋ねれば明快に説明してくれるであろう。一方、日本では生徒が毎日清掃をしている。理由を尋ねれば「毎日使用している教室などを、清掃して感謝の気持ちを持つ」といった讃所歌的な答えが先生から返ってきそうである。それ以上でも以下でもなく、極めて「短章的な」答えである。職員会議で生徒に清掃をさせる意義について白熱した議論が起こるとは思えない。外人教師なら問題提起をしそうなこの問題は、そうならない配慮さえ学校側がして、伝統（つまり制度化した言霊思想）を守るのではないか。先述のように、これが制度化した言霊思想の典型で、村上に言わせれば日本人が「ロゴスを欠く」元凶になる。

では、そうやって初等中等教育の期間に「ロゴスを欠く」形で訓練された日本人が自然科学の能力を欠くとは断定できない。村上が主張し、長岡半太郎が一時期思い詰めたように日本人が「ロゴスを欠く」なら、自然科学におけるノーベル賞受賞者は一人もいなくて当然である。それがそうではない。

一方、ノーベル文学賞について、小説家はともかく（すでに二人いる）、詩人の受賞者が日本人から出るとは、まず絶望的ではないか。村上が主張し、長岡半太郎が一時期思い詰めたように日本人が「ロゴスを欠く」という考え方は、この事情の説明になるのではなからうか。

小西は明治の象徴詩について「末流の追随者が数ばかり多く出ても、それを隆盛と認めるわけにゆかない」とし、日本における象徴詩の進出期は、明治三十九年—大正二年（一九〇六—一三）の八年間に過ぎず、そもそもフランスにおける象徴詩の高潮期が一八七—一八一の約十年間だから、とくに不運でもなく、象徴詩はフランス詩界の彗星であり、あっと言う間に飛び去ったけれども、その光芒は長く尾をひき、現代詩の源流となっていると指摘する。<sup>15)</sup>

この事情の説明には、村上の言う、判断・分別を出発点とし、その表現型としての「言葉」による断定を、思想の最も基本的な位置に据えるヨーロッパの構造を、日本人が基本的に欠いているとする説明が分かり易い。フランス文学はとくにフランス的理性を示すロゴスによる文学が伝統になっていた。フランスの象徴詩は、いわばロゴスに反逆するものであった。という

15) 小西甚一、『日本文藝史 V』, (1992), p.510.

ことは、ロゴスがなければロゴスに反逆することは出来ない。日本人がフランス象徴詩を真似ても、その理由でうまくゆかない。一方、「言語」に、玄妙な機能を期待すること自体が、すでに、言語に対し、判断・分別のもつ公共的、普遍的な伝達機能以外の何ものかを求め、かつ認めていることになり、俳諧や短歌に見られる「言葉」の極度な象徴化も、そこに出発点があるとする村上の分析は、ロゴスではない「象徴詩」として俳諧や短歌があることになる明快な説明になる。

ロゴスに反逆するフランス象徴詩と無縁な日本人は、西欧基準の詩は、まず書けない。言霊思想（生に感情を露出させるものも、制度化されたものも含め）に基づく俳諧や短歌は、日本人の心に響くほどは西欧人にアピールしない。*Haiku* や秋元康の詩（卒業式、クリスマスのデートといった日本で制度化された言霊思想を上手に組み入れる）がある程度の普遍性を持ってアジアを中心にポピュラーになっても、西欧的オリジナリティー尊重（つまりロゴス尊重）のノーベル文学賞は、まず授けられないであろう。

興味深いことに、小西が日本での象徴詩進出期は一九〇六年～一三年とした、その同じ時期に、長岡半太郎が日本人の自然科学探求能力について悩み、やがてノーベル賞受賞者の推薦を依頼される立場になっても、日本人受賞候補を推薦できなかったといったことになる。ロゴスに反逆する詩が書けるか、ロゴスに基づく自然科学探求が出来るか、といった形で、「日本人にロゴスの思考回路は在りや無しや」が問われた時期ではないか。

このように小西の『文藝史』と、金凡性の「中心」と「周辺」を地理的・地政学的な関係としてではなく、「機能的・位階的關係」として捉えなおす論点を比較考察することは、双方にとって利益がありそうである。しばらく、この観点で論を進めてみたい。

金凡性が長岡半太郎の悩みを持ち出したのは、地震学の世界の最高権威であった大森房吉の権威が物理学の台頭で衰えたという文脈の中であった。その大森がサンフランシスコで少年から石を投げられた逸話で、金凡性は『明治・大正の日本の地震学—「ローカル・サイエンス」を超えて』の序章の冒頭部分を始めている。<sup>16)</sup> 当時のアメリカで黄禍論が台頭し、カリフォルニアの労働運動で中国人排斥が起り、代わりに移住してきた日本人に拡大し、日本人学童を公立学校から隔離する政策が取られ、日露戦争の日本勝利が欧米各国の危機感を高揚させた効果もあったと、金凡性は、この順番で述べる。

この順番は通常の日本人研究者の目には奇異にうつるのではないか。日本人にとって日露戦争での勝利は、第一に特筆大書すべきことである。ここで西欧諸列強と少なくとも軍事的には肩を並べることになり、その影響がアメリカ人に意識されたかどうかはともかく、日本人学童を公立学校から隔離する政策をアメリカ政府が取らざるを得ない緊張状態が生まれ、アメリカ

---

16) 金凡性、『明治・大正の日本の地震学—「ローカル・サイエンス」を超えて』, p.1.



の黄禍論が全体として高揚したとするのが日本人にとっての自然な記述になるのではないか。

「危機感を高揚」という表現も日本人にとっては馴染がない表現である。韓国人著者の未熟な日本語と片付けることも出来る。けれど、これを「危機感をあおられ日本への競争意識が高揚」と解釈して、一層著者の心理に近づくことが出来るのではないか。ここで述べられた黄禍論は、中国人、日本人を対象にしたことで、韓国人は(韓国という国そのものが存在していなかった)含まれていない。そして欧米人から見たアジアを脅威とする見方の根拠は、西欧を脅かす勢力がアジア発であることが歴史的に多かったこと(中国人を脅威とする見方の根拠になる)、アメリカに移住した日本人が低賃金で文句も言わずよく働いたこと、日露戦争に勝利した(日本人を脅威とする見方の根拠になる)ことである。

アメリカに移住した日本人が低賃金で文句も言わずよく働いたことと、日露戦争に勝利したことが、アメリカ人の意識で結び付くのかどうか、黄禍論に組み入れていいのかどうか、日本人研究者の多くは戸惑いを隠せないのではないか。何より黄禍論は「文化としてのアジア」に対して西欧人が恐怖を抱くことである。中国人の場合は中国人街をつくったりして、アメリカに移住後もある程度文化的アイデンティティーを保ったかも知れない。しかし、日本人ほど外国に移住して文化的アイデンティティーを放棄する民族はいない。現在でもシェイクスピア研究の米国博士論文で、中国人は文化的アイデンティティーを残してシェイクスピア論を書くのに、日本人は完全に文化的アイデンティティーを消し、完全にアメリカ人になって論文を書く。ましてや本国内で食い詰めた労働者の場合、アメリカに移住して低賃金で文句も言わずよく働くとき、日本人が文化的アイデンティティーを主張したとは思えない。

日露戦争に勝利したとき、サムライが戦う姿が戯画化されて欧米のジャーナリズムに登場したように、フジヤマ、ゲイシャ、サムライなどで表されるステレオタイプの「日本の文化」が欧米で問題になったことは確かである。日露戦争勝利は「文化の問題」として捉え得るので、黄禍論の対象になり得る。しかし、アメリカに移住した日本人労働者は、純粹に現地人労働者を経済的に圧迫したので迫害されたのであって、「文化の問題」ではないのではないか。この場合、黄禍論と直接関係があるかどうか分からない。

金凡性の当該の著作の序章の冒頭にある少年は、果たして「地震学の世界の最高権威であった大森房吉」に石を投げたのであろうか。「地震学の世界の最高権威」を意識して石を投げたのであれば黄禍論と関係がある。しかし、石を投げるような少年に、それだけの教養は期待できない。「日本人のくせに周囲から尊重されている人物」くらいの意識しかなかったのではないか。そして「日本人のくせに」の意識は黄禍論のような「文化としてのアジア」を意識したものではなく、自分たちを経済的に圧迫する「黄色いイケスカナイ野郎」くらいの意識だったのではないか。とすれば、これは経済が絡んだ人種差別であって、黄禍論のような「文化差別」ではない。

こうした疑念が湧きおこるのは、金凡性に責任があるのではなく、日本人と日本文化の特異性のせいではなかろうか。「人種差別」と「文化差別」が一致していれば、金凡性の書き方で問題はない。中国人の場合は、「人種差別」と「文化差別」を区別せずに、アメリカでの中国人排斥を黄禍論で捉えて問題はない。けれど、日本人排斥の場合は「人種差別」と「文化差別」を区別せざるを得ない。

日本人が関係する差別問題は「人種差別」だけでなく、「名誉白人問題」や、差別する側に回るものとして「先進国人意識」がある。

まず「名誉白人」とは何を意味するのか検討しよう。「名誉会長」「名誉教授」といった言葉から分かるように、それはまず「会長」「教授」といった言葉が「偉い人」を意味するという価値観があって、職を退いても、まだ「偉い人」と同じくらいの扱いを受けてしかるべき人物という意味合いがある。同じく「名誉白人」には「白人」が「偉い人」を意味するという価値観があって、人種的には「白人」ではなくとも、「偉い人」と同じくらいの扱いを受けてしかるべき人物という意味合いがある。

そう考えると、現在「名誉白人」と呼ぶにふさわしい人物を考えるなら、それはアウンサン・スーチーではなかろうか。先頃英国議会で上下両院合同の議員が集まる前で演説した。英国史を少しかじったものであれば、演説をした場所の格の高さに目を見張る。エリザベス女王が開会式のときに着座する場所と同じ地点なのだ。そういう見方をすれば、人種的には「白人という偉い人」ではなくとも、「白人という偉い人」と同じくらいの扱いを受けてしかるべき人物になったことになる。

しかし、これを考えると、どうしても『1984』で有名なジョージ・オーウェルの初期の作品である『ビルマの日々』<sup>17)</sup>を連想する。白人クラブに入会を許される「名誉白人」のインド人がビルマ人の悪辣な人物に追い落とされる話がかかれている。これは英国独特の支配技法で、ミャンマー統治のため英国人が直接支配するというよりミャンマー内外のビルマ族以外の様々な民族に統治させるやり方である。即ちビルマ族を最下層において、キリスト教に改宗させた山岳民族（カレン族、カチン族、チン族）をその上に置き、華僑をその上に、さらにインド人を最上層において支配するやり方である。<sup>18)</sup>「名誉会長」「名誉教授」が会社組織の階層性や大学の職階性に依存するように、「名誉白人」の考え方は「白人を偉い人とみる価値観」に依存している。

では日本人は「名誉白人」なのかという問いは、日本人は「アジアの盟主」なのかという問いとともに問題視さるべきものである。アジアを「支配したがる」白人の視点で見れば、日本

---

17) Geroge Orwell, *Burmese Days*, (1934).

18) 山口洋一、寺井巖、『アウン・サン・スーチーはビルマを救えるか』, (2012), p.100.

人を「アジアの盟主」にして、共同でアジアを支配し、できれば対等より少し目下に日本人をして、日本も白人の言うことを聞く存在にしたい（その先には日本人を介したアジアの間接統治を視野に入れる）のが本音であろう。

一方、日本人の側で「名誉白人」と呼ばれることを嫌う考え方には二つある。一つはアジアと連帯して「白人の支配」を否定する立場である。これは「アジアの盟主」としての責任論と結びつきやすい。アジアをまとめる責務が日本にあるように思うのである。アジアの連帯を強調する。白人を先生と見て、アジア人を生徒と見て、日本人は昔で言う級長の役割をするという考え方である。これを否定する場合も、一度この考え方を採用しておいて、これを否定する。もう一つは、そもそも白人は当初日本を植民地化しようとしていて、伊能忠敬の地図を見て考えを変えた。植民地化の対象になっていない日本は、対象になっている他のアジア地域とは異なる。日本は「名誉白人」でもなければ「アジアの盟主」でもない。強いていうなら「アジアの支配者」になろうとして失敗した国と見る見方である。

この「アジアの支配者」になろうとした意識には「先進国意識」「先進国クラブ入会」といった点がある。これは、支配や被支配の考えを究極に推し進めた結果として、支配や被支配の考えを度外視できる領域に達することを意味する。つまり日本人は、その意味で「名誉白人」ではなく「白人そのもの」になってしまうのだ。現状での「文化差別」を、差別する側に立って感じたのは、留学したとき、ロンドン大学の研究所で、いきなり日本語で話しかけられることが日常化したときのことである。そこは大学院大学でもある研究所（ウォルバグ研究所）で、大学院生以上でなければ原則として入れない空間である。研究所の外ではアジア人ということ中国人、韓国人、日本人の区別はつかない。英国人は日本人であることを確かめてから日本語で話しかける。ところが研究所内でアジア人の風貌なら日本人に決まっているとして、日本語の出来る白人は、みな日本語でいきなり話しかけてくるのである。

「大学院大学でもある研究所にアジア人がいれば、それは必ず日本人」という考え方（おそらく事実であろう）を英国人からされることは、良くない感情とは思いつつ、中国人や韓国人を研究レベルで凌駕したような気持ちの良さがないとはいえない。とはいえ、その感覚は差別する側に回るものとして「先進国意識」にほかならない。

このことは金凡性の「日本の地震学は、早くも1900年代にはアメリカに自国の科学者を派遣し現地で歓迎されるほど成長していた。しかしそれと同時に、科学といえども、当時の人種観念を簡単に乗り越えるものではなかった。地震学者の科学的実践も、ナショナリティーという文脈にはめ込まれていたのである」<sup>19)</sup>という記述に疑義を生じさせる。つまり、先述の、少年は、果たして「地震学の世界の最高権威であった大森房吉」に石を投げたのであろうかとい

---

19) 金凡性,『明治・大正の日本の地震学—「ローカル・サイエンス」を超えて』,p.1.

う疑問と同じ疑義である。

ロンドン大学留学中の体験から言えば、大学院大学内は、アカデミックな職階制の規律はあっても、「人種差別」「文化差別」は一切なかった。大学院大学を一步出れば、バレエ鑑賞で退役軍人の年齢の白人から露骨な差別的行動をされたことがある。後ろから私が邪魔になって舞台が見えないとクレームをつけてきた、そのクレームが、単なる通常の劇場でのトラブルの範囲を超えていた。周囲の白人女性がその白人を抑え、私は娘と席を替わってその場は収まった。私の娘と席を替わるのには、特別な意味がある。若い日本女性は英国では特別扱いされる。「人種差別」の対象にならないのだ。とはいえ、私が受けた「人種差別」の場合は、私の日本人らしい風貌が問題であって、私がアカデミズムに属するという事は全く関係がない。

大森房吉の場合も同様であったのではないか。アカデミズム内では全く「人種差別」「文化差別」がなく、外では日本人排斥の風潮の一環として少年から石を投げられたのではないか。そうであれば、「科学といえども、当時の人種観念を簡単に乗り越えるものではなかった」かどうか、極めて疑わしい。

白人は当初日本を植民地化しようとしていて、伊能忠敬の地図を見て考えを変えたと繰り返し述べたことの意味は、ここでも極めて重い。英国は日本を植民地化の対象から外し、ペリーは伊能忠敬の地図を単なる見取り図と思って日本来航時に持参し、その正確さに驚嘆して日本を植民地化する野望を捨てたという。それ以後、厳選されたアカデミズムの世界では、日本は「先進国クラブ」の仲間になりうる資格を獲得し、実際に長岡半太郎という人物が出現するまでも、「人種差別」「文化差別」とは無縁の世界に生き得る人物を輩出する資格を有してきていたと考えられる。これを主張すると、平凡性の著作の枠組みが崩れてしまう。しかし高度なアカデミズム・ネットワークの世界では、日本は早くから「先進国クラブ」の一員であり、「人種差別」「文化差別」なしに研究活動をしている人物がいた。

日本人が「名誉白人」ではなく「白人そのもの」になってしまうことがあり得ることは、体験するまで信じられない面があった。ロンドンのウォルバーク研究所では、一步中に入れば、通路に多くあるドアを通過するとき、大多数の人々は道を譲って、文部省在外研究員として日本からやってきた教授である私のために、ドアを開けてくれ、ワインを頭に載せて歩く訓練をした執事のような教務係長は、六箇月の新参者期間（その間は結構冷たい態度であった）を過ぎれば恭しく仕えてくれ、図書館の若い白人女性の司書は直立不動で私の質問に答えた。この大学院生を経て司書になった女性については、経歴から、私の滞在期間に決まった次の就職先についてまで報告を受けた。いわゆるプロミネント・プロフェッサーといわれる一握りの人々を除いて（この人たちの存在を知らず、道を譲らなくて突き飛ばされそうになった）、私は差別されるどころか君臨する側の立場で過ごした。

この研究所から歩いて行ける距離にある大英図書館では、五年間のアカデミックな入館証を

獲得し、獲得手続きの折に女性係員は感じがよく、男性係員はあまり感じがよくないという、先述のバレエ鑑賞時に似た感覚を体験したものの、入館証を獲得してしまえば、大抵の部屋に入室できて、16世紀の資料まで直接手に取ることができた。そこには差別はなく、金凡性の言う「科学といえども、当時の人種観念を簡単に乗り越えるものではなかった」どころか、まさに「科学であるからこそ」差別がない世界に遊ぶことができた。ただし、それは入館証の威力であって、研究所内のような礼儀正しさと笑顔にかしずかれていた訳ではない。

ところが昼食になると事情は一変する。英国はどこでも‘English Queue’といわれる行列に並ぶ。それはサービスを楽しむ人が一人に限られる「縦の行列」なら問題はない。サービスをする側に選択の余地がない。ところが大英図書館の食堂は、料理のショーケースの前に人々が横に並んでひしめき合い、給仕する側が給仕する相手がある程度選べる。そこでは、白人の紳士淑女が最優先（当然レディーファーストで淑女が紳士より優先される）なのは仕方がないにしても、その次に食い込めるかどうかの問題になる。私はりゅうとした背広を着て、背筋を伸ばし、できるだけ英国紳士らしい発音の英語で料理の名前を叫び、その地位を得ようと必死になる。後回しにされたら、昼食時間が長くなって様々に差し支えるからだ。

この昼食時の状況は、おそらく日英関係が影響するであろう。大英図書館での研究活動に昼食を含めるなら、昼食時の状況は、まさにナショナリティーが影響する。金凡性が言う「科学といえども、当時の人種観念を簡単に乗り越えるものではなかった」ことになる。そこでは入館証の威力は無効であった。日本人の風貌を、服装やマナーや英語の発音で補い、英国紳士に近づける努力をする必要があった。

一方、昼食時にはアフリカから来たらしい黒人の図書館利用者から話しかけられ、食事の同席を求められ、食事をしながら「差別」についての苦情を聞かされたことがあった。その人も服装やマナーや英語の発音で、人種から来る、差別の対象となりかねない風貌を補い、風貌を英国紳士に近づける努力をする必要があったのであろう。けれど、服装やマナーはともかく、英語はフランス語なまりの発音であった。

この黒人と接したことで、科学技術NPOが盛んな英国と、盛んでないフランスの差が、両国の植民地経営の手法の差にも関わるのが、身に染みて体験できた。フランスの普遍はフランス的合理主義に基づくメリトクラシーであって、それは植民地経営と人種差別にまで影響するフランス的普遍である。一方、足で歩いて植民地を獲得し、未だに英連邦の形で多くの国と関係を持つ英国は、西欧的合理性の押し付けはしない。このフランス流と英国流の差は、私のランクの高い入館証の「獲得経緯」と「効力の発揮」に対応していた。

その黒人が五年間有効のアカデミックな入館証を持っていたかどうかは確かめようもない。持っていた可能性は低い。そのとき思ったのは、必ずしも大英図書館の食事に「入館証の威力は無効」という先述したことは正しくないということであった。つまり、大英図書館でランク

の高い入館証を獲得できたのは、そもそもロンドン大学の研究所に入れる立場を獲得したのと同じ「アカデミック・ネットワーク」で得た紹介状のお蔭であった。そして、私が研究所で様々なスタッフに「名誉白人」ではなく「白人そのもの」のように扱われていなければ、日本人の風貌を、服装やマナーや英語の発音で補い、英国紳士に近づける努力をすることに、これほど力を注がなかつたらと思う。日常的に英国紳士としてあつかわれているから、英国内で英国紳士として振る舞う態度を熟知している。ほんの少しそれを強調する態度をとるだけで、昼食時にも、入館証のランクが低い一般の図書館利用者としていたならばあったであろう差別（料理のサービスを後回しにされる）を乗り越えることが出来た。その意味で「入館証の威力」はここでも有効だったのだ。それはランクの高い入館証の「獲得経緯」がもたらす、英国流の普遍性である。

さらに、この黒人利用者とトイレに入ったことがあった。かなり広いトイレなのだが、急に真っ暗になった。おそらく若い白人がトイレを出るとき、ちょっとした反射神経的な習慣で、中に人が数人居るのを忘れて電気のスイッチを切ってしまったのだ。黒人はすぐに「被差別感覚的な」叫びをあげた。私は事情を察してすぐさま戸口に向かい、スイッチを入れてトイレ内は元の明るさに戻り、中に居た白人利用者から「Thank you!」の叫びが上がった。

これも考えてみれば入館証の効力だと思う。このようなとき、なぜ白人利用者まで凍りついで的確な行動が出来ないのだろうかと思うと、どうやら大英図書館の威圧感に気圧されているのだと思う。世界から訪れる利用者に、貴重な資料を提供する館内にはかなり厳しいルールがあって、それを守らせるために多くの係員が、ロンドン塔の守衛のような服装をして、目を光らせている。私には最高ランクの入館証を持っている気構えがあるし、毎日通う研究所に受け入れを決断してくれた研究所長は、大英図書館の理事を兼ねていた。いざとなれば、理事と交渉する覚悟がある。そう考えれば、館内で率先してトラブルを解決することまで、入館証の威力が関係する。これもランクの高い入館証の「獲得経緯」がもたらす英国流の普遍性になる。

一方で、マイナス面も否定できない。研究所内で知り合った別の日本人研究者との交流を妨げる「威力」が、このランクの高い入館証にあった。当初、日本人同士であることを喜び、メールのアドレスを交換し、交流を約束し合った。しかし、私が入館証を持っていることを知ってから、何となく相手は私を煙たがり、交友は途絶えてしまった。ランクの高い入館証の「効力の発揮」は、機械的で、科学技術NPOの発生を妨げるフランス的普遍をもたらす。そのこととは対照的に、黒人の利用者が昼食時に近づいてきたのは、私の日本人らしい風貌（おそらく有色人種としての親しみ）が原因であったと考えられる。

このロンドン留学体験から、本稿と関わる、二つのこと（すでにランクの高い入館証の「獲得経緯」と「効力の発揮」として記述してきた）が得られる。一つは科学技術NPOの隆盛についてである。先述した「シェイクスピア現象」の一環としての科学技術NPOの隆盛と、こ

れとは対照的な、「榎木論文」がフランスを例にとって説明するような、それが不活発な地域が存在することとの比較考察について、ある見解が得られた。それは紹介状によってロンドン大学の研究所に留学した日本人同士の仲が良好になりかけているとき（NPO法人化の萌芽といえないだろうか）、大英図書館の入館証の格の差で妨げられたというのは、人格との触れ合い、AからZまでの伝記が大きな書店の広い面積を占めるといった、固有名詞を大切にす英国文化の中でNPOが盛んなのに対し、入館証で差を設け、係員が冷たい、おそらくフランス的にシステム化した大英図書館方式では、NPOは盛んにならないであろうという点である。フランスは、長い滞在経験がないので詳細は論じられないけれど、あらゆる生活で大英図書館の入館証のランクの差のようなシステムが働いているのではないか。低学歴者排除・教育メリトクラシー尊重の間接民主主義の伝統と表現もできる。

フランスで盛んで、英国にも大英図書館の入館証のような形で存在する、低学歴者排除・教育メリトクラシー尊重の間接民主主義の伝統は、英仏共通ではある。けれどバカロレアの点数方式のフランスと、GCSEや面接で、機械的な点数付けでない方式の英国とではNPOの盛んな程度が異なる。ロンドン大学の研究所と大英図書館を往復する体験から、得られたものは、元は推薦状という機械的ではない方式でも、入館証の格で入れる室や資料に差を設けると、英国もフランス化することである。それを実感とともに認識した。

第二は「植民地化」の傷跡である。同じ英国に留学して大英図書館を利用する身でありながら、「植民地化の被害」を訴えるような黒人に対して、どう共感してよいか戸惑った。おそらく「植民地化の被害」を「強大な外国文化を継承・発展する状況」に置き換える必要があるのであろうと感じた。実際、「植民地化の被害」を受けていない日本人としては、「強大な外国文化（特に白人文化）を継承・発展する状況」で、黒人と連帯するよりほかにないのではないか。

金凡性の著作にも「植民地」という語が頻出する。その項目「0.1 日本の科学のヒストリオグラフィー」<sup>20)</sup>の結論は、バサラが提唱する日本科学の状況の構造分析としてのモデル（1）知識の素材を提供する段階（資料収集）、（2）従属的に科学知識の生産に参加する段階（植民地科学）、（3）独立的に研究を行う段階（自立科学）という3段階を採用するというものであった。ところが、地震学がこの分析に当てはまらないので、その点を探求するというのが、この著作の目的だという。

ここまで読んで、すでに大英図書館での黒人に対していただいたのと同じ、「植民地化の被害」を共有するものとしての連帯を韓国人の著者から求められているような感じがした。軍事的、政治的に植民地化されなくても、圧倒的な白人科学の力の前にひれふして、その「文化的植民地」になったことは、地震学だけを唯一の例外として、他のアジア諸国と日本とは同様だとい

---

20) Ibid., pp.2-5.

うのであろうか。

そこには疑問を感じる。そしてバサラのモデルの第二項目、即ち（2）従属的に科学知識の生産に参加する段階（植民地科学）という記述のうち、「植民地科学」という記述は、もし日本に当てはめるのであれば、「強大な外国文化（特に白人文化）の科学を継承・発展中の科学」と改める必要があるのではないかと思う。

植民地化された民族の痛みは、痛みを受けたものにしか分からないのかも知れない。けれど、日本が植民地化されなかった事実は動かせない。そこに科学を生む文化として他のアジア地域の文化とは異なる面があることは否めないと思う。何が何でも日本の科学に「植民地」という言葉を使おうとするところに、強い疑問を感じる。このことを、金凡性がバサラのモデルに達する前に先行研究として検討したことにも適用して、再考してみたい。

まず島尾永康の日本の科学史を（1）中国科学の時代（2）明治維新以降 30 年間の移植期、（3）第一次世界大戦と前後して一部の個人と一部の研究機関が登場した時期、（4）戦時（第二次世界大戦と思われる）の研究拡大時期、（5）日本科学の成熟期という、五つに分け、日本において科学とは外部から「移植」をされ、その後「成熟」してきたという歴史認識を掲げる。<sup>21)</sup> バサラとの違いは「植民地」ではなく、科学を樹木に喩え、いわばアジアを西欧の科学の「樹木」の「植林地」と看做す点であろう。

次に金凡性が紹介する村上陽一郎が言う「近代科学はキリスト教など西欧の思想的基盤を背景に誕生したもので、日本人は科学に関する理解も皮相的にならざるを得ない」や渡辺正雄が言う「科学精神における『西洋的絶対』と『東洋的相対』を比較して東洋人は科学への貢献に限界がある」<sup>22)</sup> は本稿で盛んに引用している「日本人はロゴスを欠く」という村上の指摘同様、上記の比喩で言えば、西欧の科学という樹木が、もうひとつうまく育たないのは、日本の土壤に問題があるのではないかという指摘になる。

次に金凡性は「西欧の科学という樹木を日本の土壤に移植」という比喩で表される事への批判を紹介する。江戸期の科学と明治期の科学の間に人的・制度的連続性があるとの指摘（アメリカの科学史家バーソロミュー）や、江戸時代の技術システムの変化が明治以降の技術発展につながっている（モーリス＝スズキ）との指摘である。<sup>23)</sup> 上記の比喩で言えば、西欧から明治になって移植された樹木だと思っていたものに、多く江戸時代から生えていた樹木が混じっているという指摘になる。

次に金凡性は「追いつき史観」への批判を紹介する。19 世紀は西欧でも科学の制度化が進

---

21) Ibid., pp.2-3.

22) Ibid., p.3.

23) Ibid., p.3.



行中で日本は遅れて参加しただけ（広重）とか、日本の技術発展経路が西欧とは大きく異なるという議論はヨーロッパを神秘化したため（中岡哲郎）とする意見を紹介し、日本の経済成長およびその特性を所謂「文化的な特殊性」ではなく歴史の中の政治・経済的な文脈を考慮して説明すべきとした上で、日本の歴史的経緯を中国のみならずロシア、インドとも比較する意見（インクスター）を紹介して、「文化」そのものに対する反省的・分析的作業が必要と指摘する（モーリス＝スズキ）ことを紹介する。<sup>24)</sup>

「移植」の比喩で言えば、当初西欧の科学という樹木が西欧以外の地域に「移植」されたと思っていたけれど、それは「移植」ではなく、同様の樹木が西欧以外の地域に「遅れて生えてきた」ということになり、そもそも西欧の科学を樹木に喩えること自体、政治・経済を無視した、虚妄であったということになる。

これらを整理するには、具体的な史実に基づくモデル設定が必要ではないだろうか。例えば白人が当初日本を植民地化しようとしていて、伊能忠敬の地図を見て考えを変えた事実は、日本にとって重要事件でも、科学史にとっては大した事件ではない。暦学の粋を集め実地計測で緯度、経度を書き込んだ地図作成について、それを単なる科学的な知識として知見を持つだけなら、欧米のみならず世界中の国々で可能であり、そのような知識人の存在は早くからあったことであろう。それを実行して実際の地図作成に至るには、科学的知見というより幕藩体制の「人的・制度的」力が必要になる。伊能忠敬の地図は、その力が徳川幕藩体制にあることの証明になる。そして、その力は軍事への応用が可能な力である。植民地化しようとした場合、日本が幕藩体制の「人的・制度的」力を使って反撃してくるのは目に見えているので、欧米は日本の植民地化をあきらめたのだ。そう考えれば、これは政治・経済の問題であって、科学の問題は科学そのものの問題ではなく政治・経済をリードする要素としての科学の問題ということになる。

こうした政治・経済と科学との絡みを考慮して科学的な発展を考えるには、例えば「ニュートン科学と大英帝国発展」といったモデルを設定すればいいのではなからうか。先述の「日本の技術発展経路が西欧とは大きく異なるという議論はヨーロッパを神秘化したため」という議論に答えて、ではなぜ神秘化が行われたかを問えば、「ニュートン科学と大英帝国発展」が神秘的なほど華々しかったからと答えられる。

そもそも「植民地化」をするには主権国家が他の強大な主権国家に従属して主権を奪われる必要がある。日本はマッカーサーによる占領期間を除いて、有史以来、その意味で「植民地化」したことはない。「地震学の世界の最高権威」を意識して石を投げたとも思えない少年の投石を「地震学者の科学的実践も、ナショナリティーという文脈にはめ込まれていた」ことの証拠

---

24) Ibid., pp.3-4.

として持ち出す金凡性の論調は、政治が絡むことを拡大解釈し過ぎている。実際に「植民地化」された祖国の痛みがあれば、その被害感情の延長として祖国が誇る学者の投石被害を考えるかも知れない。けれど、その思考回路を絶ち切り、厳密に政治と科学の関係を考えると、大森房吉投石被害を、その科学がナショナリティーの文脈に入ったことと取るのには疑問符が付く。これに対し「ニュートン科学と大英帝国発展」モデルは政治と科学を絡める文脈で捉え得る。即ち、アイザック・ニュートンは英国政府によって国葬の礼（ポルトガルなら火焙りにされただろう人物が国葬にされると滞英中のヴォルテールが驚いた）を持って葬られた。もちろん当時「自然科学」という概念が確立された訳ではなく、ニュートンの業績が「科学者の業績」と明確に認知されていた訳ではない。けれど、後に科学者として讃えられ、その業績が科学の業績として高く評価される人物を英国は国葬にした。それは金凡性が大森房吉について「地震学者の科学的実践も、ナショナリティーという文脈にはめ込まれていた」と書くより、はるかに確実に「科学者の科学的実践が、英国というナショナリティーという文脈にはめ込まれていた」ことの証拠になるのではないか。そして、これから検討すべきは、果たして「世界的評価を受けた日本人 大森房吉」と「世界的評価を受けたイギリス人 アイザック・ニュートン」が平行関係にあるや否や、ということになる。

金凡性は従来の日本科学史を批判した意見を紹介する。即ち（1）西欧の歴史に合わせた図式的な時代区分、（2）「東洋と西洋」という二分法、（3）「先生と弟子」という図式、（4）「独特な模倣者」という観点、そして（5）途上国の発展モデルとしての日本、といったステレオタイプに基づいていたと批判する意見（ロー）である。そして、ローが代案として提案しているのは、科学活動における中心部と周辺部という概念に基づいた議論で、先述のバサラによる科学の周辺部における科学の拡散および自立化のモデルだという。<sup>25)</sup>

このモデルは日本よりもまず英国に当てはまるのではないか。「ニュートン科学と大英帝国発展」を考えると、まずニュートンが出現したとき、英国は必ずしも科学活動における中心部ではなかった。ガリレオと法王庁の対立が有名なように、科学的な自然観と聖書による自然観の対立をはじめとして、対立を科学活動に含めれば、大陸ヨーロッパがまず西欧の科学活動の中心部であった。

その後も、中心は大陸ヨーロッパにあるという意識は、ニュートン以後も科学論文をラテン語と英語と両方で書く科学者が続いたことにも現れている。英国の科学者がもはやラテン語で論文を書く必要がなくなった頃、英国が世界の科学活動の中心となり、逆に英語圏にない世界各国の科学者が英語と自国語で論文を書くようになる。つまり科学活動の中心がどこにあるかは、科学者が論文をどの国の言葉で書くかに注目すれば、ある程度分かるのではないか。日本

---

25) Ibid., p.4.

は長く科学に関する叙述を漢文で行ってきた。その時代は、日本にとって科学活動の中心は中国にあり、日本は周辺部だという意識があったのではないか。しかも、中国語というより漢文で書くということは、出来あがった文章を中国語の発音で読むのではなく、書き下し文という日本語で読んでいたことになる。ニュートン前後の英国の科学者がラテン語と英語と両方で論文を書いていたことと並行して、日本の科学者は漢文という、書けば即ち中国語（文字で表されたもの）と日本語（頭の中で音読するもの）と両方で論文を書くことになる。やがて『ターヘルアナムトミア』のようにオランダ語で書かれたものが漢文に訳される。先述の「前野良沢、杉田玄白といった解剖学を導入した二人」などによって『解体新書』（1774）に結実する。ということは、中国語と日本語と両方で論文を書く日本の科学者が、中国語の部分に欧米語を重ねることになってゆく過程を示しているのではないか。もちろん江戸時代までの日本人の科学活動（欧米語の学術書のオランダ語訳を漢文に訳して学ぶ「蘭学」）を、欧米の科学者の活動（実験・観察・論文作成）に、厳密に重ねることは出来ない。けれど科学活動の中心部と周辺部という考え方には、かなり沿った分析になるのではないか。日本では、自国を常に科学活動の周辺部と捉え、当初は中国を、やがて欧米を中心部と捉えるようになる。

さて英国に戻って、英国人にとって科学活動の中心部は自国ではなく大陸ヨーロッパであった点を論じる。英国の政治との絡みを指摘すれば、その間英国王室は外国人（スチュアート王朝はスコットランド人であって、イングランドの外国という意識もあったとすれば）に占められて今に至っている。‘Queen Elizabeth’を‘Elizabeth Regina’とラテン語で表記することを先に指摘した。また「天皇」という二文字熟語の持つ言霊思想（制度化された）についても指摘した。この二点を絡めて論じることで、英国と日本の政治の類似性について考察してみたい。科学にとどまらない広く「文化活動」の中心部と周辺部の意識が表れているからである。

ニュートンが国葬で葬られた時期からほどなくハノーバー王朝となり、英国教会の首長を英国王が兼ねることによって、主だった公務員が英国教会を信奉することが不文律となった。ブレア首相は、そのためにカトリックであることを首相在任期間中だけ中止して、英国教会に改宗した。この英国憲法が不文律で、王室が外国人に占められるということ、「政治を含む文化活動」の「中心部と周辺部意識」ということで、日本の政治との類似を、憲法解釈まで含めて論じれば、法学者や政治学者から一笑にふされる議論になるかも知れない。

けれど英国王の署名は、先述のように‘Queen Elizabeth’より‘Elizabeth Regina’とラテン語で表記する意味を込めて、‘Elizabeth R.’の表記が一般的である。また日本の天皇の「署名」は「御名御璽」であり、「御璽」は「天皇御璽」と彫りつけられた印章である。この「天皇」は漢語の二文字熟語であり、一種の創作漢語に近いことも論じてきた。歴史的に英国も日本も国家意思の最高の表現に、ラテン語と中国語という外国語を使用してきた。「政治を含む文化活動」の「中心部と周辺部意識」で、両国は後者、即ち「周辺部」の意識を未だに有している

と指摘しても、そう荒唐無稽でもないのではないか。

この観点に立つと、ともに御名御璽が付された終戦の詔勅と日本国憲法を比べた場合、日本において成文法である日本国憲法は果たして最高法規であろうかという疑念が湧く。その前文に「憲法に反する詔勅は認めない」趣旨が述べられているので、詔勅より憲法が優先させられることは「法的」には疑いがない。けれど、文学研究者が「科学活動の中心部と周辺部」という議論をする文脈で分析すると、必ずしも「法的」な筋道だけがすべてではないように思える。

例えば後で詳しく論じる内田樹の『日本辺境論』は「日本人は理念的なアイデンティティーを確立出来ない」嘆きに満ちている。およそ成文憲法で「理念」を語らないものはない。日本国憲法だけでなく、遡って明治憲法でさえ、決して「理念」とは無縁ではない。ゆえに明治憲法でさえ、自由民権運動と明治の文学を観察するとき、着物を着なれた日本人が、ごちなく洋服を着ている感を否めなかった。これも「理念」に馴染めない日本人の性質ゆえと考えられないであろうか。憲法や「理念」が問題になるとき、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』の翻訳・公演がなされ、結局しっくり日本人の観客の心に届かなかった。現在、成文法の日本国憲法は定着して日本の最高法規になったと信じたいし、そう信じたいことの最右翼が法学者、政治学者、そして国会議員であろう。「法的」な筋道が否定され、成文法の憲法が最高法規でなくなったら、この人々は立場を失う。

しかし、一方、文学研究者の実感を語り、「理念」と日本人の心に届く文学的感動との齟齬を解消しようと努力すれば、印鑑に注目することになる。国立大学に奉職すると憲法を順守する書類に署名捺印させられるのは良いにしても、「公務員としての政治的中立」は護憲にせよ改憲にせよ、憲法が絡む運動をやり過ぎないことという感覚を否めない。実際、政治的中立をやかましく言う施設の場合、憲法が絡む運動をする団体に貸すことを渋り「憲法を云々することは政治活動」として「政治的中立」とは違和感のあるものとする場合もあるのは、どう解釈すればいいのであろうか。そうなると、国立大学に奉職して「憲法を守る」誓約書に署名捺印したのは、「政治活動」であったのだろうかという疑念が頭をかすめる。

一方、印鑑など無関係な世界に目を見張ることがある。昨今のアフリカでの「アラブの春」の動きの情報が入る。エジプトでは、選挙で選ばれた大統領が軍によって公然と解任され拘束される。エジプトに限らず、選挙が行われても、すぐに選挙に負けた側から「選挙に不正があった」との叫びがあがる国々の様子を見てみると、日本という国は、少なくとも選挙管理委員会から責任者の署名捺印のある当選証書が発行されれば、原則としてこれに従い、不満があれば裁判で争い、最高裁の判決が出れば、一応従うことになることが注目される。これを聖徳太子の十七条の憲法のうち「詔を承りては必ず慎め」の一項と結び付けて考えるのは荒唐無稽であろうか。

つまり、国立大学に奉職して署名捺印したのは、成文法である日本国憲法遵守の誓約ではな

く、聖徳太子の十七条の憲法のうち「詔を承りては必ず慎め」の一項であったような気がしてくる。言い換えれば詔勅の持つ歴史的な権威の重さである。そして歴史的に詔勅の権威は御名御璽の、特に御璽によって保たれてきた。このことは文学研究者の実感と「法的」な筋道の矛盾を、いくらか解消させてくれる。というのは、国立大学に限らず日本の所謂「お役所仕事」の根幹は印鑑である。有印公文書によって「法的」な活動のすべてが行われる。法規的なピラミッドは印鑑の持つ権威の軽重によって測られる。そして、印鑑の中で最高の権威を持つのは御名御璽の御璽ではなかろうか。（御璽より国璽が本来上位の印鑑かも知れないものの、大日本帝国時代以来の「大日本国」の文字が刻まれたものがまだ新憲法下の現在も使われていて、運用上、国璽が御璽より上だというように思えない。）

印鑑の軽重で比較すれば、終戦の詔勅も日本国憲法も同じく御璽が押されていて、その意味では同等である。先述のように前文に「憲法に反する詔勅は認めない」趣旨が述べられている。けれど、歴史的経緯を見ると、むしろ終戦の詔勅の内容に反しないので新憲法が認められたように感じられる。というのは、エジプトなど憲法がすぐにクーデターでひっくり返され、タイのように政治勢力の争いを何とか王が収めていても、その権威が利かなくなってきた国際情勢を見るとき、終戦時、本土決戦を叫ぶ軍の一部もあった状況で、昭和天皇の終戦の詔勅ひとつでピタリと争いが収まる凄さに改めて驚嘆する。その内容は艱難辛苦に耐えて他の国々と仲良くしていこうというもので、日本国憲法の平和主義と合致する。しかし、平和主義という「理念」が盛り込まれているのが日本国憲法であり、万葉和歌のような「制度化された言霊思想」として「終戦の日」という記念日（祈念日）設定のコンセプトが盛り込まれているのが終戦の詔勅ではなかろうか。万葉和歌のような終戦の詔勅と、「理念」の塊のような日本国憲法（戦後、この内容と文学をつなぐ努力をした人々があって今なお活動が続く一方、これを押し付けられた憲法として否定する文学者もいる）を、形式的な権威でつなぐのは御璽という印鑑である。

玉音放送が昭和天皇の肉声を伝えたということで、口頭での伝授や昭和天皇個人の人柄が強調され、終戦の詔勅の、少なくとも権威ある公文書としての内容はあまり問題にされない。けれど、実際は終戦の詔勅が天皇自身の声で朗読されたのであって、天皇個人が国民に話しかけた訳ではなく、欧米流のスピーチとは違う。政治を語るなら、明治天皇、大正天皇、今上天皇と続く中で的人格比べなども行われ、英国ではそうした出版物も頻繁に出されている。しかし、天皇の権威は、グレイトの形容がなされる明治天皇でも、お加減が悪かったと噂され表に出ることの少なかった大正天皇でも同等である。それは天皇の権威を支えるのは人格ではなく「天皇」という二文字の創作漢語が意味する内容であり、万葉和歌に象徴される制度化された言霊思想だからである。その「天皇」の二文字は御璽という印鑑に刻まれ、それゆえに御璽は重い意味を持つ。

つまり人麻呂の持統天皇を讃える歌が、持統天皇のときに「天皇」の呼称が確立されたとい

われるのに、「大君」と書かれ「天皇」とは書いていないと先述したように、文書に書かれた「天皇」の二文字と、「大君」「帝（みかど）」とかつて呼ばれていた呼称とは違う。昨今「大君」「帝（みかど）」は流行らないので、その代わりに「天皇さま」「陛下」といった呼称が使われるにしても、天皇個人を意識した「親しみ」やその延長としての権威付けと、御名御璽の御璽に刻まれた「天皇」の二文字の権威は違う。

さて文学研究としては終戦の詔勅と日本国憲法について、欧米の概念を押し付けられたものかどうかの問題になる。これは科学技術社会論の問題でもある。つまりローが従来の日本科学史が反省すべき点の第一に挙げた(1)西欧の歴史に合わせた図式的な時代区分にもつながる。しかし、反省しろといっても、「ニュートン科学と大英帝国発展」といったモデルを設定すれば、必ずしも反省の必要はないのではないか。科学に政治・経済を絡めれば、大英帝国の発展の歴史は無視できない。17世紀から20世紀までの400年余り、世界はこの影響下で進展し、科学も進展した。日本は江戸時代から蘭学を通じて西欧の歴史にも敏感であったし、西欧の歴史の強い影響を受けて日本科学史があることは否定できない。

ローは第二に(2)「東洋と西洋」という二分法を批判する。しかしこれも「ニュートン科学と大英帝国発展」といったモデルを設定すれば、植民地化を進める中で英国が骨身にしみて感じたのが東洋と西洋の違いであろう。この差は決して概念の押しつけではなく、実際の現地人との接触の結果痛感したことであって、これを日本科学史から排除する理由はない。

ローが反省すべき点の第三に挙げる(3)「先生と弟子」という図式は、まず儒教文化では実際に生きた図式である。儒教文化の影響下にあるアジアの留学生が「先生」に対して絶対服従に近い態度を取ることは、今なお続く現象であり、この図式を否定してバサラのモデルを採用するはずの金凡性が、当該の著作の序章で「日本の科学全般が西欧に追いつこうとしていたと言われている時期に、如何にして日本の地震学者は欧米人に科学知識を教える『先生』という地位にまで上がることができたのか」を「本書」の目的とすると述べている<sup>26)</sup> ことにも窺われる。

日本人も儒教文化の影響下にあるので「先生」を尊重する。しかし、この金凡性の表現を聞かせたら「とんでもない。私は欧米人を教える『先生』なんかではありません。いつまでも弟子の立場です。もし欧米人に私より知識のある人がいないとしても、今度は私は地震学そのものに教えを乞う弟子です」と大森は答えるのではないか。これは資料があって実証的な指摘ではなく、日本人の文化の型として示唆しているだけである。もし、大森がこの日本人の文化の型に従わず、「そうだよ。私は欧米人を教える『先生』だよ」と答えるであろう資料があれば、そちらの方が注目される歴史的資料になるであろう。おそらく、そのようなことはないと推定

---

26) Ibid., p.2.

されるので資料検索を行う気にもなれない。日本では特定の存在を「先生」とせず、ひたすら真理を謙虚に学ぶ態度だけを儒教から得たモラルにするように思われる。いずれにしても「先生と弟子」の図式を日本科学史から排除する理由はない。

ローが第四に挙げる(4)「独特な模倣者」という観点は、日本科学の特質を示すと同時に英国の科学の特質ではないか。それを言うには、英米と大陸ヨーロッパの微妙な差について考える必要がある。科学技術社会論に親しめば「欠如モデル」批判、「科学の社会構成主義」といった論点で、英米系の思潮が大陸ヨーロッパと違うことを感じられる。もう少し遡ってニュートンに注目したとき、「ニュートンの古典力学」という言葉が、ニュートン主義というより「ラプラスの悪魔」を表すことを、本論文シリーズでも度々指摘してきた。また英国王室がスチュアート王朝以降外国人によって占められているといった指摘は、何より英国と大陸ヨーロッパの違いを示している。

要するにローマの征服と法王庁の権威によって英国は西欧の一員と看做されてはいるものの、違いを強調すれば、英国は大陸ヨーロッパの「独特な模倣者」として科学技術を発展させたことになりはしないだろうか。デカルトとニュートンを比較して、科学技術の立場からは正誤がどんびしゃり出てしまうので、デカルトをガリレオとニュートンの間に挟まれた独断的誤謬を犯したほんくら科学者にしてしまう向きもある。しかし哲学の観点でいえば、デカルトは大陸ヨーロッパで大きな足跡を残し、ギリシャ哲学の伝統から現代へと続く西欧哲学の流れの中の正統派である。ニュートンはロックと親しく、二人で独特の哲学を話しあったにしても、西欧の正統的哲学からは外れている。もちろん英国王室は現代でこそ経済力で世界を圧倒しているものの、大陸ヨーロッパの選帝侯と比べた場合、王家としての毛並みの良さを言えば、かなりの傍系である。

同様の議論をすれば、日本は中国科学の「独特な模倣者」であり、蘭学によって西欧科学の「独特な模倣者」でもあった。この英国と日本の平行関係は、英国がラテン語と英語を併用し、日本が漢文という中国語と日本語を同時に併用できる言語で科学を記述したことに象徴される。そして、植物の新種発見、恒星の新星発見にラテン名を付けることは、かつての科学的発見としての注目度はなくなっても依然として続いている。日本は新しい学問分野でも、欧米語の術語を、カタカナ表記の後、創作漢語の数文字熟語で表すことは現代も続いている。本稿の追求テーマを科学技術社会論の学術タームで言えば、カタカナ語では「文学研究のヴァリディティー・バウンダリー (Validation Boundary)」であり、創作漢語の数文字熟語では「文学研究の妥当性境界」になる。

こうした創作漢語という文化のクローンを作って様変わりの文化を生み出す技術は、大変に能率の良いものであった。まずは家持の歌のように近代歌人が絶賛する歌、即ち漢詩文のクローンを突然変異させたような歌(まだ仮名文字の発明もおぼつかない段階で、素朴とは言い難い

高度な文藝）で実現し、明治維新と戦後の驚異的な発展を見た。

そして最後にローが日本科学史の反省点として挙げた(5)途上国の発展モデルとしての日本、といったステレオタイプは、上記の文脈でいえば、まさに英国が当てはまる。つまり英国王室は現代でこそ経済力で世界を圧倒しているものの、大陸ヨーロッパの選帝侯と比べた場合、王家としての毛並みの良さを言えば、かなりの傍系であると述べたことがすべてを象徴している。ヘンリー八世が国家として法王からの破門を甘受したとき、大陸ヨーロッパは、そもそも、カトリックを信じない「国家」（カトリックを信じない「勢力」ではなく）が西欧に出現したことに衝撃を受けた。それからスペインの無敵艦隊を、悪口をいえば「海賊の寄せ集め」のような船団でくだし、大英帝国の発展へと英国という名の「途上国」は歩み始めた。文化を含めた観点では、当時の英国はまさに「途上国」であった。選帝侯によって選定される神聖ローマ帝国皇帝と教皇が勢力争いをする、伝統的な貴族、大貴族、大司教以上の僧職者の争いから見れば、全くの傍系の田舎貴族を王としていただく、遅れた田舎者の国が英国であった。フランス革命は王と、ハプスブルグ家出身のマリー・アントワネットの首を切り落とした。カトリックの僧侶の血で川を染めた。それは、そのくらい第一身分、第二身分の取奪が激しかった。英国の革命が比較的穏やかだったのは、英国の貴族、僧侶に、そこまでの特権がなく、そこまでの取奪がなかった田舎の「途上国」だったからではないか。

日本が昔から「途上国」の意識を持ち、やや海を隔てて距離のあるところに位置する強大な文化に「追いつき追い越せ」の意識を持っていたことは、内田樹の『日本辺境論』に詳しい。まず英国が「途上国」として神聖ローマ帝国の皇帝を頂点とする選帝侯システムと、その親族が独占する大司教以上の高位聖職者が支配する秩序の中で、何とか発展を望んでいたことは、日本が「華夷秩序の価値観」から見下される辺境の国であったことに対応する。

「華夷秩序の価値観」<sup>27)</sup>として内田樹が『日本辺境論』で述べたことは、中国の漢詩文を睨みながら、ときに取り入れて万葉和歌を制作した家持を取り巻く古代からの環境であり、華夷秩序の中の「中心と辺境」「外来と土着」「先進と未開」「世界標準とローカル・ルール」という空間的な遠近、開花の遅速の対立を軸にして、「現実の世界を組織化し、日本人にとって現実を存在させ、その中に日本人が自らを再び見出すように」してきたということは、上記の文脈でも十分裏付けられる。<sup>28)</sup>

科学技術が常に辺境で発達したことは石井威望の著作<sup>29)</sup>に詳しい。科学技術関係者では「日本辺境論」はすでに常識であったことを人文科学にまで押し広げたのが内田の功績であるのか

---

27) 内田樹、『日本辺境論』,(2009), p.58.

28) Ibid., p.244.

29) 石井威望、『科学技術は人間をどう変えるか』,(1984).



も知れない。それは「中国人は本質的に商人だとする論」に対して「日本人は本質的に工人だ」と言う経済関係者の意見の応用とも見られる。問題は内田の論調が「日本人は理想的なアイデンティティーを確立出来ない」嘆きに満ちていることである。

これは科学技術と密接に関係している。例えばアメリカは「理念国家」と言われる。それはすでにアメリカが英国の植民地として存在していたとき、フランシス・ベーコンが『ニュー・アトランシス』を書き、そうした科学技術立国の領域は、まず英国で王立協会として成立し、次第にアメリカ合衆国自体が科学技術立国の領域化したことと関係している。構成員がピューリタンの神との契約（現代では神は公共の概念に名を変え始めている）が常に理想を求め永久革命を目指すこと（これは科学技術立国とは直接ではないものの、科学技術が「神の秩序の探求」との意識があるなら密接に関係する）と軌を一にしている。というのは、科学技術ほど具体的に永久革命のように革新を続け、科学技術に携わるものが、常に現状に満足せず、現状の底にある普遍的法則を求め、まずは科学技術の、やがて社会全体の改革を求め続けるからである。この意味で科学技術はアメリカが「理念国家」であることと表裏一体の関係にある。

先述のように科学技術が常に辺境で発達し、中心が移動し続けたことは石井威望の著作に詳しいし、科学技術とは、文化の辺境意識を持つものがやがて文化の中心に取って代わる運動のようなものとも言い換えられる。それは英国のアイザック・ニュートンが、まずラテン語（当時の文化の中心の言葉）で論文を書き、同時並行で自国語である英語で論文を書いたことに象徴される。

万有引力の法則と言われるニュートンの発見が書きとめられたものを探索すれば、'Naturalis Principia Mathematica' というラテン語の論文と 'The Mathematical Principles of Natural Philosophy' という英語の論文があり、'De motu corporum in gyrum' というラテン語の草稿があって、その意味は英語で言えば 'On the Motions of Bodies in Orbit'（この草稿のニュートン自身の手になる英訳本が存在しないにしても、いつでも翻訳可能）ということであるし、ニュートン以後もラテン語と英語の二つで科学技術を書き表す習慣は長く続いた。現在では、各国の科学者が英語と自国語で科学的発見を叙述する。英語がかつてのラテン語に取って代わり、大英帝国の発展に伴い大陸ヨーロッパから英国に文化の中心が移動した後、さらに直近の現代では中心が英米に移動したことの何よりの証拠になっている。

これらの議論のコアになることは 'gravitation' というラテン語をキーワードとして、それを同時に英語の重要な単語にニュートンが変換したことである。これに 'universalls' というラテン語が起源の一つと言われる英語の 'universal' と英語の 'law' を付けて 'the universal law of gravitation' が「万有引力の法則」というニュートン自身が考えた英語である。

このように、科学技術が文化の中心から周辺へと移動することは、ラテン語から英語への変換として捉えられる。'the universal law of gravitation' が日本語の創作漢語である「万有引力の

法則」（中国語は万有引力定律）になるとき、それがそのまま日本の科学技術の発達をも象徴する。同時に指摘したいのは「万有引力の法則」という創作漢語である。これを「一般的な重力」と訳した場合との違いは、今日の教育メリトクラシーの問題に直結する。

「万有引力の法則」という漢語、創作漢語を組み合わせた造語がなければ、日本の中等教育はもう少し論文重視になっていたであろう。つまり「一般的な重力の法則」では、何の事だか分からず、説明できるかどうか中等教育では教育の主眼に常になるのではないか。「一般的な重力の法則」を説明させるなら、様々な物理法則を論じる指導も行われることになる。ところが「万有引力の法則」という漢語、創作漢語を組み合わせた造語一つで、それがアイザック・ニュートンと結び付き、様々な法則を表すイメージを喚起し、日本人としての様々な応用を導き出す核になる。

こうした学術タームを漢語、創作漢語を組み合わせた造語で多く生み出す日本の「知」の在り方は、万葉和歌の発生以来日本が開発した特殊技術ではないか。このおかげで、日本の中等教育は学術タームの暗記と数式を使っての応用に終始すればよく、論文指導は必要なくなる。文系ではさらに数式を使っての応用が不要だけに学術タームの暗記だけで、かなり高度な知見が身に付くことになっている。

こうした言葉に注目した科学技術発展分析は、金凡性の分析とは対立する面がある。金凡性の考え方の要点は「周辺の科学活動とは具体的な生のデータを取り扱うこと、そして中心的な科学活動とは抽象的な解析を行うこと」<sup>30)</sup>になる。これを文字通り取って、ニュートンが晩年にパーティーの席で漏らし、伝説化した「万有引力の法則はリンゴの落ちるのを見て発見した」が真実なら、ニュートンが「究極の抽象的な解析」を行った場所、即ちニュートンの郷里のリンゴ園が「中心」になり、ケンブリッジ大学の研究室でデータ整理をしている弟子たちの作業は「周辺」になってしまう。また、仮にニュートンが弟子たちをひきつれて、遠い辺境の地に旅行に出かけ、そこで密かに万有引力の法則の発見と論文化を行い、そこから西欧に向けて手紙などで発信すれば、その旅行先が「中心」になるのであろうかとも疑念が湧く。

さらに金凡性は次のように語る。

例えば、ケンブリッジ大学のある研究室に人材と情報、研究費などが集まり論文の数など知識の生産性が極めて高い現象があった場合、それをその研究室の地理的な位置や大英帝国の権力といったマクロな枠組みに還元して説明する代わりに、データと情報の流れ、そしてそれを可能とするネットワークなど、より詳細な知識の関係性を以ってその現象を説明できるのである。<sup>31)</sup>

---

30) 金凡性、『明治・大正の日本の地震学—「ローカル・サイエンス」を超えて』, p.11.

31) Ibid., p.12.

これをニュートンの万有引力の法則発見に摘要してみよう。「大英帝国」を考慮に入れずにこの現象（万有引力の法則発見）を説明できるであろうか。先述のようにニュートンが「究極の抽象的な解析」を行った場所、即ちニュートンの郷里のリンゴ園が「中心」になり得ず、仮にニュートンが弟子たちをひきつけて、遠い辺境の地に旅行に出かけ、そこで密かに万有引力の発見と論文化を行い、そこから西欧など全世界に向けて手紙などで発信したとしても、その旅行先が「中心」になることもあり得ない。あくまで「中心」はケンブリッジ大学のニュートンの研究室である。そのことは「大英帝国」の要素（さらにケンブリッジ大学における科学研究の歴史と伝統）なしには説明できない。

このことは反証めいた説明も可能である。ニュートンの研究室が、英国のケンブリッジ大学ではなく、例えば大陸ヨーロッパにあれば、法王庁からの迫害はまず免れなかったであろう。迫害なしに研究に専念できたのは「大英帝国」の保護があったからだという説明は無視できるであろうか。また「データと情報の流れ」と一口に言う。ニュートンがラテン語を使い、大陸ヨーロッパの学者の文献を読んで参考にした中に、大陸ヨーロッパの「知」への尊重があって、それなしに発見はなかったし、法王庁の迫害もまた、それがあつたほどに自然科学的世界観にこだわる大陸ヨーロッパの「知」があるという意味で、ニュートンに影響を与えているはずである。迫害の場からの知見だけを情報として得て、迫害そのものはない環境だからこそその発見といえる。その意味で大陸ヨーロッパと「大英帝国」の緊張関係もニュートンの発見と無関係ではない。

けれど以上はテキストだけを尊重してきた科学史の伝統に沿った議論であつて、図表など視覚データを尊重する現代的視点に立てば、ある程度金凡性が切り捨てたマクロな枠組を、組み込むことが出来るかもしれない。そうすれば、「言葉に注目した科学技術発展分析は、金凡性の分析とは対立する面がある」と述べたことが、幾分解消される。例えば「リンゴの逸話」は数式で表されるべき現象の視覚化に大いに役立っている。「万有引力の法則」という漢語、創作漢語を組み合わせた造語は、「リンゴの逸話」と相まって中高生のためのマンガによる解説書の効果を、すでに文字で持っていたことにもなる。

これに呼応して、金凡性は物理学的偏見でテキストだけを尊重してきた科学史の伝統を改め、これから地震学を分析するとき、図表など視覚データ（論文になる前の中間段階と位置付ける）を重視するという。<sup>32)</sup> この立場を取れば、ニュートンの「リンゴの逸話」も、「逸話として語られる視覚データ」と見做せば、論文になる前の中間段階と位置付けられるかも知れない。そう考えれば、伊能忠敬の地図も、全世界の地図が完成してはじめて完結する「緯度、経度による世界観」に基づく「緯度、経度で地球の全地域の正確な地図が書ける」という仮説の検証に至る中間段階として位置付けられる視覚データという意味で、欧米の持つ、それまで書き上げ

---

32) Ibid., p.13.

た地球の部分地図と同等の資格を持つとも考えられる。そう考えれば、一度金凡性によって排除された「研究室の地理的な位置や大英帝国の権力といったマクロな枠組みに還元して説明する」面が、データとして組み込まれる形で復活することにもなる。

以上の観点で、金凡性の地震学分析を検討してゆこう。

金凡性は『ブリタニカ百科事典』の1902年版に「地震に関する研究の進歩、そして現象に関する世界的な関心は日本で始められた成果をその起源とする」と書かれ、「奇妙に見えるだろうが」の但し書きがあることを指摘し、それが欧米人のオリエンタリズムであって、実際は地震学が外国人によって始められたことを指摘する。<sup>33)</sup>つまり日本地震学会がお雇い外国人主導で始められ、外国人会員が多く、会費もドルやポンドで支払え、外国からの送金も多かったという。<sup>34)</sup>

これを伊能忠敬の日本地図作成との類似で考えてはいけないうだろうか。蘭学の知見を元に幕藩体制の人的・制度的力を示して日本地図は作成された。それは江戸期の科学と明治期の科学の間に人的・制度的連続性がある、「緯度、経度で地球の全地域の正確な地図が書ける」という仮説の検証に至る中間段階として位置付けられる視覚データという意味で、欧米の持つ、それまで書き上げた地球の部分地図と同等の資格を持つとも考えられる。

同様に、「緯度、経度で地球の全地域の正確な地図が書ける」という仮説の検証が属する学問領域を考えると、結局現代では同じ地球科学に属すると思われる地震学の場合、「地球の全地域の地図に地震データを書き込み、地震現象を科学的に把握できる」という仮説の検証のために、「地図に地震データを書き入れる」作業を、地図だけの場合は西欧から始めたことを、地図に地震データを書き入れることは、西欧からではなく日本から始めたということではないか。『ブリタニカ』の1902年版の記述は、そのように解釈すべきではなからうか。

さらに考察すべきは、「お雇い外国人」のナショナリティーである。それは伊能忠敬が地図作成の元にした蘭学の知見と同様に考えてはいけないうであろうか。人物と書物を同様に考えるのは、一見乱暴に見えるかも知れない。けれど、植民地に宗主国の国籍を持つ外国人が乗り込むのと、植民地化をあきらめた国に「お雇い外国人」として入国するのでは、根本的に違う。

ここで「お雇い外国人」の地位について国家主権を持ち出して検討するのでは、せっかく「研究室の地理的な位置や大英帝国の権力といったマクロな枠組みに還元して説明する代わりに、データと情報の流れ、そしてそれを可能とするネットワークなど、より詳細な知識の関係性を以ってその現象を説明できる」と先述して紹介した金凡性が採用した方式の利点が失われる。

そこで、一連の研究に収斂するデータと情報の流れがあるとき、そのリーダーは誰かという

---

33) Ibid., p.20.

34) Ibid., p.21.

ことは問題にすべきということを描きたい。例えば先述して検討した「リングを見て万有引力の法則を発見」という事実が、郷里のリング園でのニュートンの詳細なスケッチや記録が存在して立証される（リング園の環境でなければ得られない知見があって、ケンブリッジの研究室とは異なるという証明も必要）ような事柄なら、あきらかに世界を動かした大発見という科学活動の中心はニュートンの郷里のリング園であってケンブリッジ大学の研究室ではないとも考えられる。その間、いかにデータと情報の流れ、そしてそれを可能とするネットワークなどがケンブリッジ大学のニュートンの研究室にあって、多くの弟子たちやニュートンの友人が研究活動に携わっていたとしても、大発見そのものはすべてアイザック・ニュートンのリーダーシップのもとに行われていた。従って「データと情報の流れ、そしてそれを可能とするネットワークなど、より詳細な知識の関係性を以ってその現象を説明できる」の中の「関係性」で、「誰がリーダーか」ということは、大きな要素である。発見者はニュートン、場所は郷里のリング園という事実は動かさないことになってしまう。同時にニュートンが絶対的リーダーの場合、さらに問題は複雑になる。「リングの落下が頻繁で沈黙思考に相応しい郷里のリング園」は天才の閃きに適した環境ではある。けれどケンブリッジ大学の研究室に戻れば、そこでもニュートンが絶対的リーダーであるので、総合的な判断でリング園とケンブリッジ大学と、どちらが「中心」かを判断せざるを得ない。ニュートンがケンブリッジ大学では絶対的リーダーではなく、数々の反対に合い、その理論が認められたのは後世ということなら、リング園に軍配が上がる。そうでなければ、たとえリング園が閃きの決定的な環境としても、なお総合的にはケンブリッジ大学に軍配が上がる可能性も大きい。それを考えるとき、明治初期の「お雇い外国人」に戻れば、その存在は、少なくとも「第一のリーダーにはなり得ない存在」と認識すべきではあるものの、さらに詳細な検討が必要になる。

ここで気を付けなければならないのは、明治期日本は植民地ではないから「お雇い外国人」は明治政府の指揮下であって、その研究と発見の第一の権利は明治政府にあり、もし、仮に日本が英米の植民地であれば、第一の権利は宗主国の英米にある、といった乱暴な議論である。

年代的にマックスウェルなら明治政府の「お雇い外国人」になり得る。仮にマックスウェルが明治政府の「お雇い外国人」になって、日本の当該の学会を手伝い、その最中に電磁方程式を開発したとしても、日本の明治政府やマックスウェル招聘の責任を負う日本人学者に何等かの功績があることになり、マックスウェルは「第一のリーダーにはなり得ない存在」と認識すべきということになるであろうか。マックスウェルが本国で無名の科学者ならそうなるかも知れない。けれどマックスウェルが本国で著名なだけでなく絶対的なリーダーであれば、そういう訳にはいかないであろう。

同様に、ニュートンやファラデーが江戸時代の出島にやってきて、蘭学者と交流し、それぞれの発見を、まず日本人蘭学者が漢文で記載して発表したとしても、だから研究の「中心」が

日本だということには、ならないであろう。また先述のように人物と書物を同等に考えて、二人を蘭学の知見と同一視することも出来ないと思われる。

上記のような場合、日本という場所は、ニュートンの万有引力の法則発見時のリンゴ園のような立場になるのではないか。「お雇い外国人」もしくは、それに近い立場で科学者が日本に来て、その人の本国での立場が絶対的に強い場合、いくら日本に主権が確立して「植民地ではない」ことが明らかでも、当該学問領域における本国での立場の強さが優先されるのではないか。また電磁気学や物理学に日本という環境が特別だという要素がなければニュートン、ファラデー、マックスウェルが日本で研究したとしても「中心」を日本には置けない。ところが地震学の場合、地震は日本で頻発しても英国では起こらないという要素がある。ニュートンの万有引力の法則の発見の場合、物が落下するのを観察できるのがニュートンの郷里のリンゴ園に限られていた場合、科学活動の場所としての「リンゴ園」へ特別な意味を持つ。地震と日本という場所の関係は、仮説ではなく事実として、そのようなものであった。

今まで「植民地ではない」日本で、英国本国に帰れば著名この上ない科学者が研究する場合を空想してみた。逆に日本が終戦直後GHQの統制を受けて国家主権を制限され（一種の植民地状態になり）、日本国憲法が誕生したとき、マッカーサー司令官が本国での立場が極めて強く、米国大統領に就任するようなことがあれば、まさに「押し付けられた憲法」論議に説得力が増す。しかし、たとえ明らかに日本の国家主権が制限された状態であっても、結局米国大統領になれなかったマッカーサー司令官の本国での立場を考えれば、「押し付けられた憲法」論議が絶対的説得力を持つとは言い難い。日本の為政者の力もかなり有効で、日米合作の憲法という解釈も成立する。日本国憲法を科学的発見に喩えた場合、ファースト・オーサーは日本人かアメリカ人か、その「科学的発見」が行われた科学活動の「中心」は、果たして日本なのか、それとも「GHQとアメリカ合衆国」なのか、という議論が、明治期の「お雇い外国人」の位置を考えることに対応するのではないか。

日本国憲法を「科学的発見」に喩える場合、欧米の民主主義ルールを一部知らなかった（一部だけである）日本が知らされた面を否定できない。ところが、日本地震学会がお雇い外国人主導で始められ、外国人会員が多く、会費もドルやポンドで支払え、外国からの送金も多かったにせよ、「学会設立のルール」を当時の日本が熟知していたように考えられるのは、かなり重要なことではないか。

明治期に欧米の植民地化の対象になった国々では、まずは手始めに、そもそもの学会設立のルールから、対象国のインテリや支配者に欧米諸列強が教える必要があったのではないか。たとえ、外国人会員が多く、会費もドルやポンドで支払え、外国からの送金も多かったにせよ、むしろそうした学会を日本で設立できたことに、逆に明治日本の先進性を感じる。これもまた日本国憲法と欧米の民主主義ルールとの関係の類似性を検討したくなる。

日本国憲法の場合、すでに明治憲法の下敷きがあったから、ある程度欧米の民主主義ルールを取り入れていた上に、さらに徹底したものをアメリカから教えられたに過ぎない。では明治期に、明治の知識人たちは、どうして「学会設立のルール」を受け入れ、「人的・制度的」制度として活用できたのであろうか。

それには日本の和歌学の伝統があったことも重要視すべきと考える。「万葉・古今・新古今」の和歌の伝統の中に、歌合わせがあって、和歌の批評学が発達し、勅撰集などの権威ある歌集に歌が載ることを目指す人々の有り様は、ほとんど権威ある学会誌への掲載を目指して努力する科学技術研究者の有り様と大差ない。この和歌学の伝統の中で、頂点を極めたのは藤原定家であって、若い頃「達磨歌」と言われ、難解さを揶揄されながら、和歌の第一人者となり、冷泉家という歌の家の基礎を築いて、冷泉家が日本文藝の古典の保存と和歌学の継承の中心になっていることは、論を待たない。

この点について、内田樹の『日本辺境論』が「日本人は理念的なアイデンティティーを確立出来ない」嘆きに満ちていることは、以上の和歌学の伝統のうち、藤原定家を頂点とする努力を一部無視している点がある。そこにある「本意」「天台止観」「禅の悟り」を和歌の表現で実現するまでの努力は、まさに「日本人が理念的なアイデンティティーを確立出来た」証拠ではないか。おそらく、司馬遼太郎や村上陽一郎に加えて内田樹もまた、「本意」「天台止観」「禅の悟り」では、「理念的なアイデンティティー」にはならないのであろう。

そうした立場に立ち、また先述したように、正岡子規の「客観写生」と、その示唆するリアリズムを主張し、過去の韻文を「語呂合わせ」と弾劾し、新しい歌を起こす「革命」を志向する動きが科学技術の発達と歩調を合わせていることを認め、この立場で、しかも自身が医者であるという点で科学者の一人である齊藤茂吉に焦点を定め、以下の歌を検討してみよう。

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも

茂吉が気象学からヒントを得た事実があるとも思えない(あるいは気象通報を耳にしている、どこかでその知識に興味を持った可能性はある)ものの、強い風で海面など水の様子がどうなるかを表現する日本語は、逆波、白波、うねり、泡立つ、渦巻く・・・など、種類は限られていて、最上川の吹雪の最中の様相を表す言葉を突き詰める茂吉の思考経路は、気象学に近い思考経路であった可能性は十分ある。また、最上川がふぶく様子を正確にとらえようとすれば、茂吉でなくても、そうならざるを得ない必然性がある。

ビューフォート風力階級 (Beaufort scale という英語の正しい発音に従ってボーフォート風力

階級<sup>35)</sup>ともいう。)で風力0から風力12までの波の様子を表す語で、まず「白波」に近い表現を拾ってみる。それは風力3～風力8までに現れる。

風力3 軟風(なんふう) Gentle breeze 3.4～5.4m/s 7～10ノットの「波頭が砕ける。白波が現れ始める」風力4 和風(わふう) Moderate breeze 5.5～7.9m/s 11～16ノットの「小さな波が立つ。白波が増える」風力5 疾風(しっふう) Fresh breeze 8.0～10.7m/s 17～21ノットの「水面に波頭が立つ」風力6 雄風(ゆうふう) Strong breeze 10.8～13.8m/s 22～27ノットの「白く泡立った波頭が広がる」風力7 強風(きょうふう) High wind / Moderate gale / Near gale 13.9～17.1m/s 28～33ノットの「波頭が砕けて白い泡が風に吹き流される」風力8 疾強風(しっきょうふう) Gale / Fresh gale 17.2～20.7m/s 34～40ノットの「大波のやや小さいもの。波頭が砕けて水煙となり、泡は筋を引いて吹き流される」である。

「逆波」に近い表現を拾おうとしても、風力8までには見当たらず、登場するのは風力9である。風力9 大強風(だいきょうふう) Strong gale 20.8～24.4m/s 41～47ノットの「大波。泡が筋を引く。波頭が崩れて逆巻き始める」がそれに当たる。

参考までに風力10～風力12までを示すと、キーワードは「白い泡」になるようである。風力10 全強風(ぜんきょうふう) Storm / Whole gale 24.5～28.4m/s 48～55ノットの「のしかかるような大波。白い泡が筋を引いて海面は白く見え、波は激しく崩れて視界が悪くなる」風力11 暴風(ぼうふう) Violent storm 28.5～32.6m/s 56～63ノットの「山のような大波。海面は白い泡ですっかり覆われる。波頭は風に吹き飛ばされて水煙となり、視界は悪くなる」風力12 颶風(ぐふう) Hurricane 32.7m/s 以上 64ノット以上の「大気は泡としぶきに満たされ、海面は完全に白くなる。視界は非常に悪くなる」となる。こうした気象について理解を深めることと茂吉の「逆白波」という言葉を精密に検討することは、決して無縁な作業ではない。これだけの考察を可能にしたのは世界を船で回って大英帝国を築いたアングロサクソニズムの作業なのである。

「逆白波」という言葉を生む茂吉の地球環境科学的思考も世界につながっていることは、ビューフォート風力階級が世界につながっていることで証明できる。歴史的にはイギリスの海軍提督フランシス・ビューフォート(ポーフォート)が1806年に提唱したもので、英文学の『ロビンソン・クルーソー』で有名なダニエル・デフォーも関わっている。現在、英米では、これが改定され、世界中の気象を視野に入れ、また家の倒壊を念頭に、より正確なものへと、さらなる改定が進行中である。これに対し、日本を含めフランスなど各国は(世界的な研究機関に研究者を送っているかどうかはさておき、国としての官民の活動について)英語のビューフォー

---

35) Beaufort scale (ポーフォートとカナ書きすべき英語ながらジーニアス英和辞典では気象庁にしたがってビューフォートとしてある。)



ト風力階級を自国語に翻訳するだけで、世界につながる努力をしているのかどうか定かではなく、少なくとも英米ほどの顕著な努力は見られない。

この点を踏まえると、金凡性の「日本に存在する外国人のコミュニティ、そして日本を眺める西欧人の視線があった。このことを考えると、初期の日本地震学は『植民地科学』としての性格を有していたとも言える」<sup>36)</sup> という指摘について、いささかの疑念を持たざるを得ない。それは「大英帝国」という言葉を使ってよければ、「大英帝国科学」であって「植民地科学」ではないのではないか、という疑念である。

まず初期の日本地震学会の会員が117人で在日外国人が61人（大部分はイギリス人）という金凡性自身の指摘<sup>37)</sup>の意味は、金凡性によれば単なる「外国人が多い」指摘になるところ、むしろ「大英帝国科学」として地震学が発出したからこそイギリス人が多いのではないか。

「大英帝国科学」という言葉は「植民地科学」と対になるもの（連想はしても）ではない。この両者の関係については、すぐに後述する。上記の気象学はアメリカにも受け継がれ「アングロ・サクソン科学」とでも言えるものに発展した。現在では地球科学の一部門である。その視点で日本地震学会の創始について表現すれば、同じく地球科学の一部門である地震学の具体例研究として、まず日本から研究が始まったということではないか。

そういう視点に立つと、金凡性の「植民地」という言葉についての感性に、かなり特徴があることに気づく。それは普通には「異国趣味」と言われることを「植民地趣味」として了解しているのだろうかと思われる言葉の感覚である。金凡性は『ブリタニカ百科事典』の1902年版に「地震に関する世界的研究事始め」は日本で、としつつ「奇妙に見えるだろうが」の但し書きがあることを指摘し、それが欧米人のオリエンタリズムであると指摘した。このことと「横浜はレンガ造など西欧式の建物が立ち並ぶ街であったが、レンガ造の建物は木造の建物より地震にもろく・・・横浜のランドスケープが有していた人的・物的な外国性こそが、1880年2月の地震を明示化し、新しい科学分野を誕生させる契機たらしめた」という金凡性の記述は、まとめれば「異国趣味」が日本地震学会誕生の要ということになる。オリエンタリズムとは欧米人が東洋を見たときの「異国趣味」であり、横浜は日本人から見たときの「異国趣味」の街である。

これが「植民地科学」としての性格を有していたと金凡性は指摘し、「日本が西欧の植民地であったという支配・被支配の権力関係を意味するわけではない。しかし科学知識が得られる過程に焦点を当てれば、そこには科学の中心部から遠く離れた地域において、西欧人がその地域特有の自然現象を研究するといった、当時の科学知識生産における中心と周辺の関係を読み

---

36) 金凡性、『明治・大正の日本の地震学—「ローカル・サイエンス」を超えて』, p.24.

37) Ibid., p.21.

とることができる」<sup>38)</sup>とする。

『ブリタニカ百科事典』の1902年版に「地震に関する世界的研究事始め」は日本で、と記載されているのに、日本が当時の科学知識生産における周辺だというのは矛盾している。地球科学の視点で、グリニッチ標準時を念頭に、当時地球科学というものが存在していたかはともかく、その視点を当時に適用すれば、ロンドンが中心で日本が周辺ということは理解できる。

この事情を気象学で整理すれば分かりやすい。ビューフォート風力階級が世界を支配し、未だに英米の基準に世界が合わせている。気象学に関しては英米が「中心」であり、金凡性の用語では、英米以外の国々は「植民地科学」として気象学を研究していることになる。ただし、気象学の場合、研究の基準設定と具体例の研究では「中心」「周辺」の区別が異なるのではないか。風力階級といった基準設定では、未だに英米が「中心」である。グリニッチ標準時ということが、つい最近まで言われていたように、「緯度、経度による世界観」に基づく「緯度、経度で地球の全地域の正確な地図が書ける」という科学研究の「基準設定」では英国のロンドンが「中心」であった。気象学についても、研究対象地域として英国や米国が「中心」である理由はないにせよ、ビューフォート風力階級という「基準設定」の細かいものが英語で書かれ、各国はその大ざっぱな翻訳を使用している点で、英米が「中心」である。

しかし、日本なら日本という地域に限っての気象研究では、日本の方が英米より「中心」であってもおかしくない。そもそも地域研究の場合「中心」も「周辺」もないのではないか。地球上で少なくとも先進国については、その地域ごとに「中心」があって、フランスの気象はフランスが、ドイツの気象はドイツが、研究の「中心」であって、そうしたことで英米に「中心」の座を譲る必要はないのではないか。ただし、発展途上国については、気象学についての知見が全くない場合、直近の先進国から情報を得るのか、旧宗主国から得るのか、とにかく「植民地科学」的な様相を呈している場合もあるであろう。

ここで強調しておきたいのは、気象学にせよ地震学にせよ、地球科学における地域研究の地域性は、科学研究全般における「中心」と「周辺」という場合の「周辺性」とは全く異なるということである。気象学で台風研究やハリケーン研究となれば、そのような風が吹く地域が研究対象として「中心」になるし、地震学は、研究対象としては地震の頻発する地域が「中心」にならざるを得ない。

従って、金凡性の「日本にいた外国人の科学者たちは、日本という『辺境』の持つ独特な自然現象に目をつけ、それを西欧人の科学知識へと変換させていった」<sup>39)</sup>という記述には首を傾げざるを得ない。先述のように、伊能忠敬の地図も、全世界の地図が完成してはじめて完結す

---

38) Ibid., p.25.

39) Ibid., p.25.

る「緯度、経度による世界観」に基づく「緯度、経度で地球の全地域の正確な地図が書ける」という仮説の検証に至る中間段階として位置付けられる視覚データという意味で、欧米の持つ、それまで書き上げた地球の部分地図と同等の資格を持つとも考えられる。地震研究の場合も同じではないか。科学技術の素養のない、未開拓の領域に西欧人が踏み込んで地震研究を始めたのではない。伊能忠敬の地図だけでなく、すでに蘭学の伝統があって人体解剖図も出版され、漢文の科学技術書も数多くある日本で、地震の観点での地域研究が始まっただけである。それまで日本人は地震を迷信の対象としても科学の対象としてこなかった事情はあるにせよ、「日本にいた外国人の科学者たちは、日本という『辺境』の持つ独特な自然現象に目をつけ」という記述は地球科学の視点でグリニッチ標準時を念頭に「中心」はロンドンだという立場を取らない限り正確ではない。

地震学に限定すれば、先述のように『ブリタニカ百科事典』の1902年版に「地震に関する世界的研究事始め」は日本で、とあることと矛盾するし、日本を「辺境」と決めつけても、では「中心」は当時どこにあったのかというと、どこにもなかったことになる。

ここで科学技術の素養のない、未開拓の領域に西欧人が踏み込んで地震研究を始めたとしたら、という想定について、具体的に考察してみよう。2010年のハイチ地震について考える。あれだけの大地震があって現地で地震研究の知見が注目されないとは考えられない。津波がある地震とは違って直下型の地震の場合、現在先進国の知見の粋を集めても、予測などは難しい。防災の知見も限定的であろう。そもそも地震研究先進国である日本でさえ、3.11への対応が限定的なのだから、ハイチという発展途上国に、はかばかしい防災の知見がもたらされることは期待薄である。

現代でさえその状況なのに、では『ブリタニカ百科事典』の1902年版に「地震に関する世界的研究事始め」は日本で、とある時期に、ハイチの地震研究事情はどうであっただろうかと想像してみる。フランスの植民地であったハイチは独立と引き替えに賠償金を請求され、経済的に苦しみ、ドイツもハイチの植民地化を狙っていて、そこで日本の明治期のような「お雇い外国人」を導入して地震学を始めるなどは、まず絶望的であっただろうと想像される。1915年にアメリカが占領しても、事情はあまり変わらなかったであろう。

これを考えると「支配・被支配の権力関係を意味するわけではない」しかし「西欧人がその地域特有の自然現象を研究する」といった、当時の科学知識生産における中心と周辺の間接的な関係を読みとることができる」という日本についての金凡性の記述は、むしろ「支配・被支配の権力関係を意味するわけではない」からこそ、平穩に「お雇い外国人」と学会をつくり、科学活動が出来たことになる。この「日本」の意味は、金凡性によるところの「周辺」（グリニッチ標準時を例示として、ロンドンが地球科学の「中心」と解釈して）として、あるいは1902年版『ブ

リタニカ』によるところの「地震に関する世界的研究事始め」の場所として、解釈される。

ハイチで平穏な先進国との共同作業が出来ないのは、絶えざる独立運動の気運があるからである。それを考えるとき、金凡性の普通には「異国趣味」と言われることを「植民地趣味」として了解しているような言葉の独特な感覚について、さらに突っ込んだ考察が出来る。

「大英帝国科学」に対する「植民地科学」、「異国趣味」に対する「植民地趣味」といった金凡性の普通ではない語感について指摘してきた。「植民地科学」「植民地趣味」はさらに「独立運動と結び付く科学」「独立運動と結び付く趣味」といった語感も指摘できそうである。金凡性のように日本に留学して日本語で著書を発表するほどに「開けた」韓国人でさえ、欧米諸列強と、そこに「追いつき、追い越せ」で動く日本がいて、それ以外は植民地化され、日本は植民地化されないまでも欧米諸列強による文化侵略を受け、文化的植民地になった面もある、といった見方をする（と、その日本語を読む限り、そのように解釈せざるを得ない）ほど、植民地化の影響は強いともいえる。

これらはすべて「コロニアル」という英語の語感と関連する問題ではなかろうか。英文学研究の学術タームないし批評用語に「ポスト・コロニアル」という言葉がある。「植民地的以後の」では何のことか分からない。「植民地主義時代以後の」と訳すべきである。ただし、英文学研究の場合、研究対象は英国の本国中心の文学なので、「大英帝国時代以後の」と訳した方が分かり易い場合が多い。さらに、独立運動が問題になるときは「植民地の独立運動を招いた時代以後の」という訳し方も考えられる。

ポスト・コロニアリズムの旗手エドワード・サイードが著した『オリエンタリズム』（1978年）の視点がポスト・コロニアル理論を確立したとも言われる。旧植民地に残る様々な課題を把握するために始まった文化研究がポスト・コロニアリズムである。第二次世界大戦後、世界が脱植民地化時代に突入し、それまで植民地だった地域が次々に独立を果たしたことが背景にある。

従って「大英帝国科学」に対する「植民地科学」、「異国趣味」に対する「植民地趣味」といった金凡性の普通ではない語感、「オリエンタリズム」から派生した「植民地科学」「植民地趣味」が「独立運動と結び付く科学」「独立運動と結び付く趣味」と解釈されかねない語感は、ポスト・コロニアリズムの視点では「普通ではない」どころか、しごく真つ当な感覚になる。この点について、引き続き次稿で論じてゆきたい。

